■ 特集 1 ■

2016 年度先端社会研究所シンポジウム講演録
題　目：支援活動から発見されるソーシャル・ディスアドバンテージ
　　－ホームレス支援の現場から－
講　師：奥田　知志 氏（NPO 法人抱樸理事長）
　　川口　加奈 氏（NPO 法人 Homedoor 理事長）
日　時：2017 年 2 月 21 日（火）14 : 30〜17 : 30
場　所：関西学院大学図書館ホール
司　会：白波瀬　達也（関西学院大学）

○三浦　これから、2016 年度先端社会研究所のシンポジウムを「支援活動から発見されるソーシャル・ディスアドバンテージ－ホームレス支援の現場から－」というテーマで行いたいと思います。

本日は、NPO 法人抱樸理事長の奥田知志さん、NPO 法人ホームドア理事長の川口加奈さんにお越しいただいております。

まず、シンポジウムの題のソーシャル・ディスアドバンテージという言葉ですけれども、これはちょっと耳なれない、聞きなれない言葉だろうと思います。

実は今、先端社会研究所に、ソーシャル・ディスアドバンテージ研究班がございまして、その代表を私がしております。神学部の榎本先生や、今日司会される白波瀬さんも一緒のメンバーです。なぜソーシャル・ディスアドバンテージという名前の班をつくったか、そのことを簡単にお伝えしたいと思います。

ベースには、いわゆるマイノリティ研究があります。それを引き継ぎ、継承しながら、ただそれをもうちょっと乗り越えようという野心をもっております。

どういうことかというと、マイノリティ研究というと、マイノリティの人たちの研究だなと、例えば障害者の人たちとか LGBT の人たち、また今日のようなホームレスや野宿者の人たちについての研究なんだなと、普通思いますよね。だけどマイノリティ研究は、別に人や集団についての研究じゃないですよね。

何についての研究かと言ったら、それぞれ障害を持っている人なり、LGBT と言われる人だったりが抱えている困難とか、生きづらさとか、そう

いうことを研究する。本来そういう研究のはずです。これまでのマイノリティ研究だと、どうしてもその人たちを障害者なら障害者とひとくくりにしちゃって、そうすると障害者でないマジョリティと障害者の人たちみたいな、こういう二分法で研究対象の人たちをひとくくりにしてしまいがちだった。そうなると、その研究のやり方自体が、マジョリティとマイノリティの人たちを、ある意味では線引きしちゃう、あるいは分断しちゃうんじゃないかと研究しながら疑問に思うところがありました。

つまり、人の研究じゃなくて、その人が抱えている困難、それをその人が抱えているディスアドバンテージの研究として考えていこうというのが、僕らのアイディアなんです。

そういうふうに研究の構えをつくり上げると、どんな意義があるか。それについては、まずソーシャル・ディスアドバンテージ、その人が一体どんな社会的不利をこうむっているのかを考えていく、そういう問いがまずひとつ生まれます。その場合は、つまりこれはひとくくりである必要は全くなくて、今、面と向かっているその人が、一体どんなディスアドバンテージ、不利な状況に置かれているかを見ていく。

今日の趣旨文にもありますように、社会的不利は恐らく物質的な格差、家がないとか、収入が少ないとか、そういう物質的な格差に始まって、それのみならず、関係的な排除みたいなもの、家族がいないとか、人づきあいが乏しいとか、居場所がない、こういう社会的不利を、一人一人の人は一体どんなふうに持っているんだろうと考えていく。これはマスとして、ひとくくりのマイノリティとして見ていったら見えなかったところまで見ていくことができるんじゃないかということです。

もうひとつは、そんな社会的不利が一体どうしてこの社会にはあるんだろうという、その原因についての問いがそこからあらわれる、誘発されてきます。

その問いについて考えていこうと思ったら、ものすごく歴史的、あるいは制度的、あるいは国家的な、いろいろな原因があるのが見えてくるわけです。中でもひとつ取り上げるとすれば、ある種の優生思想的な考え方が見えてくるであろうと思うんです。これについては昨日、神学部で奥田知志さんが講演をされまして、そこで伺ったことですが、我々はつい最近といっても、去年のことになりますが、相模原で痛ましい障害者の人に対する殺傷事件を知っているわけです。

そういう出来事が、何か異常な人によって引き起こされたと我々は考えがちだけれど、本当にそうなんだろうかという問いを奥田さんは投げかけた。実は、奥田さんがまだ大学生のころに、既にこんな事態が将来的には起こるんじゃないかと予感させられるような、そういう出来事があったと話されていて。それが何かと言えば、横浜での中学生によるホームレス襲撃事件。それが 1983 年のことです。

そのときに、こんなことがもっと大きな規模で起こるだろうと、そういう直感を抱かれたという大学生のころの奥田さん。一体、理由はどこにあるかというと、今回の相模原事件についても、その容疑者の人にとっては、世界の経済のことを考えて、あるいは日本の国家のために、あるいは障害を持った子供を抱えている家族のために、その負担を減らすために行うんだという考え方です。これは優生思想の特殊な、独特な考え方です。

でも、それがホームレス襲撃事件においても非常に似たような形で存在している。その場合に

は、町をもっときれいにする、町を美化するという理由づけで行われているわけです。どちらも社会のために役立つという信念のもとにやっている。決して犯罪などではなくて、むしろ社会のためにやっているんだと、そういう発想です。

ただ恐ろしいのは、それは僕らと無関係な話ではなくて、そういう負担を減らすとか、社会が美しくあってほしいとか、あるいは生きるに値する命と、生きるに値しない命があるのではないかという部分については、我々の中にもそのことと決して無関係ではないような自分なりの価値観が個人的にもあるし、社会の中にも行き渡っているところが恐ろしいんだという話。それを昨日、奥田さんがされたわけです。

基本的にはソーシャル・ディスアドバンテージが、この社会の中で、歴史的に、制度的に、国家的に、どんなふうにつくり出されて、なおかつ、それが我々の中にどんなふうにしみ渡ってしまっているのかを見ていくことも、この考え方、この観点から掘り下げていくこともできるのではないかなと考えております。

ということで、ソーシャル・ディスアドバンテージについての簡単な説明で、司会の白波瀬さんにかわります。

○司会（白波瀬） お待たせしました、そろそろ登壇していただきたいと思います。

簡単に流れだけ説明させていただきます。きょうの司会進行役を担当しております、白波瀬と申します。

今から川口さんの報告が 45 分ありまして、その報告の後、簡単な質問タイムを設けます。これは簡単な質問タイムで、用語の説明とか、そういったものです。要するに、皆さんからコメントをいただくとか、そういう時間ではなくて、この後のディスカッションに際して、必要な用語の確認とか、そういうレベルにとどめさせていください。5 分程度とります。

その後、NPO 法人抱樸の奥田さんより 45 分報告をいただきます。これもまた、報告の後、5 分間、簡単な質問をとって、その後、少しだけ休憩をとります。大体 4 時半ぐらいになると思いますが、そのころに 10 分程度休憩をとって、その後、40 分程度、時間をたっぷりとって、皆さんとディスカッションをしていきたいと思います。

きょうのシンポジウムですが、個人的には、大変豪華な登壇者を迎えることができたと思っております。ホームレス支援の現場では、今日の登壇者 2 人を知らない人はいないと思いますし、また NPO 業界でも非常に際立った業績を持つ 2 人、あるいは 2 団体だと思います。そういう意味でも、これまでは恐らく 1 人 1 人で講演会をされることが専らだったと思いますが、きょうは、ぜいたくにも 2 人の話を同時に聞くという貴重な機会だと思います。

そして今回は、2 人から比較的共通な話をしていただこうと思っておりますので、その中から見えてくる共通点なり、相違点なりを皆さんもつかんでいただいて、今後の皆さんの学びや、実践の参考にしていただければ幸いです。

それでは、ご発表をお願いします。よろしくお願いします。

○川口 皆さん、こんにちは。

改めまして、NPO 法人ホームドアの川口と申します。

いつも、白波瀬さんがおっしゃっていただいたように、1 人で講演をすることが多くて、そうなると大体、私は 1 人で会場に来て、1 人で帰るわけです。今日はなんと奥田さんと講演するということで、お付添いの皆さんが、団体のスタッフとか、相談ボランティアをしてくださっている方とか、当事者の方も一緒に来てくれて、何て豪華なメンバーと一緒に来れたんだと、個人的にうれしく思っているんです。何がいいかというと、これでライフラインが使えるようになった。オーディエンスと、フィフティフィフティと、テレフォンを使いながら、今日は話していけたらなと思うんですけれど、早速、オーディエンス使いたいなと思います。

まず、どんな方が来られているのかなというところがありますので、もしよかったら手を挙げてください。

学生の方、いらっしゃいます。前のほうに。

じゃあ、大学の職員の方。やや。

じゃあ、行政の職員の方。何人か。

じゃあ、支援団体の方。なるほど。

その他、その他はその他です。その他が一番多くてどうしようという感じですが。

わかりました。大体こんな感じで、そういう方向けに話していけたらと思います。

ホームドアは、私が大学 2 年生、19 歳のときに立ち上げた団体で、大阪市立大学の経済学部生だったんです。もともと 14 歳のときにホームレス問題にであって、それから講演活動等々をしていったんです。その中で、路上生活になられたら、そのまま路上で亡くなってしまう方々の姿を見て、もう一度路上から脱出できる機会をつくれないものだろうかということで、大学 2 年生のときに立ち上げた NPO 法人になります。

ホームレス状態を生み出さない日本へということで、ホームレスになりたくないと思ったらならずに済むし、ホームレス状態から脱出したいと思ったら誰だって脱出できる、そんな社会をどうやったらつくっていけるだろうかということで活動しています。

ホームドアを立ち上げた当初から、3 つの柱で活動してきました。もともとホームレス問題の構造としては、失業が 1 つのきっかけにはなるんですが、高齢であるとか、学歴が低かったり、寮生活で家も同時に失ってしまう、こういう複数の要因が抱えた状態で失業してしまうとホームレスになりやすい。ただ関係性が、関係的なつながりがなかなかないゆえに、失業してしまうというきっかけで、ずるずるとどこに頼ったらいいかわからず、ホームレス状態になってしまう。

そして、ホームレス状態から脱出するとなると、多くの方が生活保護を受けて路上から脱出されていくわけですが、生活保護がなかなか機能しておらず、結局、生活保護をとってもまた 3 割近くの人がホームレスに戻ってしまっているデータもあります。またホームレス状態から、いきなり路上から就職をする方法も考えられるんですが、なかなかこれは難しいところがある。

こういうホームレス問題の構造の中で何をするかで、まずひとつ考えたのが、ホームレスになる前の段階で、ホームレスになりたくないと思ったらならずに済むように、入口を封じようというのが 1 点。そして、ホームレス状態から脱出したいと思ったら誰もが脱出できるように出口をつくろう。まだまだ偏見が根深い日本で啓発活動を行っていく、入口封じ、出口づくり、啓発、この 3 つ

の柱を掲げて活動していこうと考えました。

最初に着手したのが、この出口づくりだったんです。そもそもホームレス状態に陥ってしまうと、なぜそこから抜け出せないのか。私たちはそこに、負のトライアングルがあるのではないかと考えたんです。仕事と貯金と住まい、この 3 つを一遍に手に入れなければ脱出しにくい。

例えば住まい。ホームレスの方なので、家を借りたらホームレスじゃなくなるわけですけれども、家を借りるとなったら、必要なのは初期費用になるわけです。ただ初期費用は、貯金がないとたまっていないわけなので借りられません。逆に家がないとなると、貯金は実はたまりにくいものなんです。家がないと出費って意外にかさむわけです。ホテルに泊まったらホテル代がかかってしまうし、どこか仕事に行くとなったら、荷物を、家がないわけなんで一旦預けないといけない。コインロッカーを借りておかないといけない。基本、毎日外食になってしまうので出費が多くなって、家がないとそもそも貯金はたまりにくい。

貯金をためようと思ったら仕事をして稼ぐ必要があるわけですが、ただ仕事をするにも実は貯金が必要なわけです。一般的な仕事は、初任給が入るのは 1 カ月後、2 カ月後だったりするわけで、その間どうやって働きに行くのか、働くためには御飯を食べないといけないし、働きに行くのにも実はお金がかかるわけです。でも、お金がないんだから働きに行けないし、例えば働くために必要な携帯だったりとか、制服だったりとか、履歴書だったりとか、必要なものが買えない状況にあります。

また、そもそも仕事に行くためには、住所がないと就職ができないのも壁になっているわけです。仕事をするには履歴書を出さないといけない。履歴書に、例えばうその住所を書いたとしても、携帯電話が必要だったりするわけです。あなた面接合格しましたよと受け取る携帯がないと仕事に行けないわけで、ただその携帯を得るためには、やっぱり住まいが必要になる。そして住まいを得るためにも、実は住民票が必要、要は家を借りるには家が必要という構造がある。この 3 つが複雑に絡み合っているゆえに、この 3 つを一遍に獲得しないと路上から脱出できない。要は、路上から脱出するには高い壁があると言われています。

では、出口づくり、どうやってつくるのか。この高い壁を、どんな人でも、ちょっとずつちょっとずつ登っていけるようなステップを提供できないかなと考えたんです。それは、うちからお金をあげます。これ、あげますとかじゃなくて、一旦うちで働いてもらいながら、ちょっとずつお金をためてもらって、お金がたまったら家を借りる準備をして、家が借りれたら次の仕事に進んでいく、そういったステップをつくれないであろうか。それを、一旦うちで働いてもらって、次の仕事に結びつけていく、いわゆる中間的就労と呼ばれるものを、おっちゃんたち向けにできないかなと考えました。

せっかく仕事をつくろうとなったわけなので、せっかくだったら、やっぱりおっちゃんたちが得意なことを仕事にできたらいいんじゃないか。得意なことが仕事だったら、それなら俺もできるよって、働くときのハードルってより下がるんじゃないかなということで、おっちゃんたちに聞いて回ると、7 割近くの人が自転車修理だったら俺でもできると答える人が多いことを知りました。

自転車修理をいかして、これでビジネスできないだろうかというので、生まれたのが HUBchari というプロジェクトだったんです。HUBchari、何かと言うとシェアサイクルと呼ばれる仕組みで、

街中にいくつか拠点があって、その拠点のどこで自転車を借りても返してもいい、レンタサイクルの進化版と呼ばれる仕組みになっています。

もともと、このシェアサイクルという仕組みは私たちが考えたわけではなくて、全世界的に広がっている第三の公共交通と呼ばれるものだったんです。電車、バスに次ぐ新しい公共交通。フランスのパリなんかが非常に有名ですが、町中に、道路上に、300 メートルおきに拠点が設置されていて、年間 22 万人が使っている。そんな大成功を受けて、日本でも東京、横浜、仙台、広島と、日本各地でシェアサイクルの取り組みが始まっている。それを私たちは大阪で、しかもパリとも、東京、横浜とも違う、そのシェアサイクルの担い手がおっちゃんたちであるというプロジェクトができないだろうかというので始まったのが HUBchari でした。

そんな HUBchari のコンセプトは、大阪の二大問題、ホームレス問題と自転車問題を一挙に解決するとしています。こうすることで、おっちゃんたち、ずっと支援される側だったんですが、自転車問題を解決する担い手として、支援する側として働いてもらえるからいいんじゃないかと思って、これをやろうと決めました。

ただ、当時、大学 2 年生だったので、何のコネクションもなかったので、どうやってやろうかなと考えたときに、行政にお願いに行ったんですが、なかなか拠点を提供してくれないことがあって、じゃあ行政がだめだったら企業さんでどうだろうということで、ビルとかカフェ、ホテルの軒先に余ったデッドスペースを軒先貢献として、お金じゃない CSR の一環として場所を提供してもらいながら拠点を設置していくことをやっていこうと決めて。実験を重ねていく中で、ついに本格的に始動することができて、最初、1 カ所の拠点だったので、そこで借りてそこで返す形だったんですが、レンタサイクル的にスタートすることができました。

最初は 4 人のおっちゃんたちが、私たちのもとで働き始めたんです。いろいろな方が来られて、100 社ぐらい面接に行ったけれど、あかんかってんと泣き出してしまう方もいらっしゃれば、1 年ぶりにまともに人と話したわという人もいたり、いろいろな方が来られたんです。水色のエプロン、水色の帽子、HUBchari カラーを身につけて、おっちゃんたちが働き出してくれたときは、ホームレス問題にであってから 6 年という歳月がかかってしまったんですけど、初めておっちゃんたちを雇えたという瞬間だったんです。

このときの私の悩みとしては、おっちゃんたちと、最初、面談をするわけですけど、面談の終わりに、きまっておっちゃんたちから、今度、社長に会わせてなって言われるんです。やっぱり、事務の女の子だと勘違いされてしまっていて、ずっと名乗り出せなかったんです。おっちゃんたちも、こんな若い子に雇われるなんて嫌やろなとか思い悩んでいたときに、あるとき拠点に行ったら看板ができていたんです。どうしたんだろうと思って中にいたおっちゃんに聞いたら、これ全部拾いものでつくったんやと言ってくれて、よく見ると自転車のチェーンが取っ手になっていて、この自転車のベルを鳴らすとホテルの奥から出てくる、わしを鳴らす呼び鈴やねんというのを自分でつけてくれて。

この方は若いころデザインの専門学校に進学していた方ですけれども、ご両親がおられなかったこともあって、学費が払えなくなって、中退して尼崎市に来ていて。ただ、その会社が 50 歳のときに倒産してしまって、50 で正社員の仕事を失ってしまうと、もう次、正社員で働けるところな

んて見つかりっこなくて、そういう中で非正規雇用になって、日雇い労働になって。日雇い労働も体を壊してしまって働けなくなってという中でうちにやってこられたので、この看板をつくってくれたときに、35 年たってようやく専門学校で学んだことが、初めていきたわと言ってつくってくれたんです。

その言葉が私はすごくうれしくて、毎日びくびくしながらおっちゃんをお雇いしていたので、看板をつくって HUBchari を盛り上げようとしてくれているその姿が、一緒に HUBchari やっていこうというメッセージと受け取って、そこからおっちゃんたちにどうしたらいいんだろうと日々相談しながら、ホームドアの支援を考えてきたんですね。

そういうこともあって、私が予想以上に看板を受け取って喜んでいたら、おっちゃんが拠点ができる度に看板をつくってきてくれて、今度はタイヤの中に木枠をはめ込んで、ちょっとスターバックスぱくったんじゃないかと、みんな言ってたんですが、ちゃんとわしを鳴らす呼び鈴もつけてくれたり。あとは手先が器用だからといって、実寸はこれぐらいですけれども、ハンガーの針金で HUBchari の模型をつくってくれたりだとか、そういったおっちゃんたちの声援もあって、私たちも拠点づくりを頑張っていきました。

これは積水ハウスさんにご協力いただいて、梅田のスカイビルに置かせてもらったりだとか、大阪ガスさんにご協力いただいて、淀屋橋のガスビルに置かせていただいたり。ちょうどこの写真が日本経済新聞に掲載されたら、大阪ガスのお偉いさんが、これはええ宣伝になるわと喜んでくれたんですね。何かというと、自社一押し商品エネファームの前で、何かいいことやっているというのが、日経の 2 面にカラーで写真つきで載ったんです。これは広告価値高いわみたいに言ってくださって。

そういうこともあって、軒先を提供してくれる企業さんからも、ほかのホテルと差別化になったわとか、いろいろなふうに言ってくれるようになって、そして実験的ではあるんですが、大阪市の住吉区さん、北区さんとも協定を結んで、区役所の前、区の駐輪場で HUBchari をやったり、現在 9 拠点、大阪市内やっているんです。そんな HUBchari から始まったホームドアとしては、おっちゃんたちとかかわる中で、ある 1 つの思いが芽生えたんです。

とりあえず、あそこに行けば何とかなるって、おっちゃんたちにそう思ってもらいたいなって。そんな安心できる場所、駆け込み寺みたいな場所、世の中に 1 個ぐらいあってもいいんじゃないか。HUBchari を軸に、もうちょっと支援に厚みを持たせていけたらなと思うようになりました。

さっき白波瀬さんに言われたのは、HUBchari で出会うおっちゃんたちが、いろいろな要因、いろいろな原因を非常に複合的に抱えていらっしゃるわけなんです。そういう複合的な要因に対応するために、私たちの支援も複合的なあり方だったりとか、多様性を、厚みを持っていかないといけないんだなと思っていました。

そういう中で、私たちソーシャル・ディスアドバンテージ、今回の題目がありましたけれども、何だろうなと思ったんです。そういう中で思ったのは、個人的な責任に起因せずに起こる不利益じゃないかと捉えて、とりあえず 10 個考えてみたんです。スタンダードにあるのは、仕事、貯金、住まい、情報、連絡手段、障害、病気、依存症、借金、家族と挙げてみたんですけれども、ただ、ここに載っているのは、非常に表面的なものでしかないのかなと思っています。

例えば、さっきおっしゃっていたようなもの。病気をしましたという裏に、社会保険制度が機能しているのかどうか。その人その人の、この項目に起こる背景が、きっとソーシャル・ディスアドバンテージにつながってくるんじゃないかなと。何回かソーシャル・ディスアドバンテージと言っているとかみそうなので、ホームドアでは SDA と略していたわけですが、そんな SDA を感じていたんですね。

社会的不利に対応するべく、ホームドアではどんな支援を展開していったのかをご説明できたらと思うんです。まず、ホームドアとしては、あそこに行けば何とかなる、そう思ってもらうためには、この世の中において完璧というのは、追い求めてはいけないものかもしれないですけれども、おっちゃんたちにとっては完璧な支援って何なんだろうと、それを自問自答しながら、そこに近づいていく過程を踏んでいきたいなと思っています。このモデルさえあればというのをつくっていけたらということで、日々、試行錯誤しながら支援図に磨きをかけていっている。

私たちは、ボリューム、数よりは、やっぱり確率なんじゃないかなと思っているところがあります。数よりも、とりあえずあそこに行ったら確実に脱出できますよとか、そういう確率を求めていくために、おっちゃんたちのニーズにどこまで寄り添えるのかというのが大切じゃないかなと思っているんです。

まず対象となるのが、失業や住居喪失をきっかけに職を失ってしまった、貯金がなくなった方をどうやって見つける、アウトリーチするかです。まず着目したのがネットカフェ難民と呼ばれている方々なんです。路上に出てから、うちにアクセスしてこられるよりは、路上に出る一歩前の段階で、ネットカフェ難民の状態で来てもらえるほうが、非常におっちゃんたちの気持ち自体も自己肯定感、まだ下がり切っていない段階ではあるので、できる限り早期に予防できたらということで、深夜営業店舗の大手さんに御協力いただいて、店舗内にこういう形で、ポスターだったりとか、トイレの中だったりとか、あとはバナー広告を張らせてもらうことで、ひとつアウトリーチを始めたんです。

もうひとつが、ウェブ広告やバナーです。特に最近の若い人は、何か困ることがあったらググってみるので、「生活、困った」、「お金ない」とか、検索すると検索順位を上に持ってきてもらえるように、グーグルさんやヤフーさんがされているサービスを利用したりだとか、またランディングページと呼ばれますが、ここに 1 枚完結のページをつくることで、これが実際のホームドアのホームページですが、この 1 つでも当てはまることがあったらご相談くださいねというページをつくることにしたんですね。

そして、従来の活動でもある、夜回り活動、私たちはホムパトと呼んでいるんですが、毎月第 2 火曜日、冬の間は第 2 火曜日と第 4 土曜日に大阪市北区を中心に、大体お弁当を毎回 80 食ぐらい配っています。私たちのホムパトの特徴としては、結構、当事者の方、元当事者の方がかかわってくださることで、料理人、調理経験がある方も非常に多いので、お弁当をつくってくださったりだとか、あとはお弁当、単に物質的なものを渡すだけではなくて、情報もお渡しできたらということで、チラシを入れています。いつでも遊びに来てくださいねとか、路上からでも働ける仕事ありますよということで、わかりやすい地図とともにお配りすると。

あとは、お弁当とかチラシを渡すだけではなくて、事務所に来てもらったら、寝袋とか用意して

いますよとしていますので、ちょうど株式会社モンベルさんがご協力いただいて、リサイクル寝袋、非常に厚い寝袋をご提供くださったので、そういったものを提供することで、より多くの方にリーチすることができているのかなと思っています。

次に、連絡をとる段階ですけれども、データで見ていくと、そもそもそういった見つける活動が功を奏して、年々、相談者数が増えていまして、今年が現時点で 200 名を超えているそうで、年齢としては、ホームレス状態の方の平均年齢が、大体 59 歳といわれている中で、13 歳以上若くなっているので、若い相談者が多いというのが、うちの特徴でもあるかなと思っています。

ホームドアを知ったきっかけで、若い方ほど、ネットとか深夜営業店舗ネットカフェのポスターとかを見て、来られている人が多かったり、逆に年配の方だと、夜回り活動で声をかけてもらったので来てみましたという方だったり、あとうちの特徴としては、知人から聞いたという方も非常に多いのかなと思っています。

おっちゃんたちが、おっちゃん同士で勧め合ってくださっていて、あそこに行ったら何とかなるよというので、友達を連れてきてくれたりだとか。また、友達を連れてきてくれた方とその友達は、非常に定着率がそれによって高くなるわけです。ホームレス支援において遁走してしまう、途中で当事者がいなくなってしまう問題があるわけですが、知人から聞いたという経由だと遁走の割合は少ないんじゃないかなと、何となく肌感でしかないですけれども、思っていることです。

また、相談の方法としては、メールや電話、来所になるんですが、来所が比較的多い、次いでメールも多くなっているのが現状になります。

続いて、連絡をとってお越しになると、相談票を作成していきます。今日も何人か来ていただいているんですけれども、うちの職員の相談員と、あと相談ボランティアで、相談業務をボランティアで来てくださっている方が 7 名いらっしゃって、相談ボランティアの養成講座を受けていただいて、相談ボランティアとして認定された方が月 2 回以上来ていただくので、その方々とともに、どういう状態なのかお話を聞いています。

この相談の時点に関しては、ホームドア自体、東京のもやいさんという団体を非常に参考にさせていただいてます。もやいさんは、今まで紙ベースで相談票をとっていたそうですけれども、一昨年ぐらいに立命館の先生と、それを全部データ化するというのを、何千件とあるのをデータ化することをされたみたいです。ホームドアは最初からデータでとっておくのがいいよと監修をいただいて、全てデータとして蓄積しています。

あとは、最初に来られた相談の状態だけではなくて、うちにかかわる中でどのような変化があったかとか、日常的な、ちょっとしたこと、今日おっちゃんと話していて、私はおっちゃんが香港で格闘技の何かやっていたみたいな話を聞いたら、香港で格闘技したというのをほかの職員と共有し合うとか、そういう日常のささいなところも含めて、データでの蓄積を大切にしているのも特徴ではあるのかなと思っています。ゆくゆくはこのデータをもとに、いろいろなおっちゃんたちの統計をとってみて、次の支援に役立てていけたらなと思っています。

おっちゃんたちから、どういう状態にあるかという話を聞いた後は、あなたであればああいう方法、こういう方法で路上から脱出できる選択肢があることを提案するのを大切にしています。決して、こちらからこうすべきだと押しつけるわけではなくて、いろいろな選択肢を提示して、本人と

相談員と一緒に決めていく過程を大切にしていけたらなと思っています。また、そのとき提案する選択肢を、より、いかに多く持っているかも、複合的な要因を抱えていらっしゃる方にとっては、非常に有効なことではないかなと思っていまして、現時点でメニューが、大きく分けて 6 つあります。

1 つずつご説明していくと、1 つ目が宿泊施設です。シェルターを運営するということです。シェルターと、あと居場所関係づくりをする。関係性の貧困があるといわれている、関係的なつながりがないといわれている方々に対して、ここが居場所なんですよと感じてもらえるような、さまざまなプログラムを提供していけたらと思っておりまして、去年から大阪の北区、梅田の駅からほど近いところに場所を借りて、「ホット＆ハウス」という、ちょっとした施設というか建物をやっておりまして、路上から脱出するのに、あんな機能もあればいいな、こんな設備があったらいいなというのをおっちゃんたちからヒアリングしていって、それを詰め込んだ施設になっています。

例えば、おっちゃんの要望で多かったのは、やっぱり路上生活が非常に過酷なもので、夜もなかなか寝られなかったりする。一晩中、夜中中、ずっと歩き回っている方もいらっしゃったりするので、何か安心して昼寝できる場所があったらうれしいなというので、ここを昼寝部屋にしようみたいなのをつくったり。あとは、ちゃんとプライバシーが保たれる相談室をつくられたらなとか、図書室、自由に本を読んだりできるような場所があったらいいなとか、ランドリー、服を洗濯、乾燥できる場所があったらいいなとか、あとは自分で自炊してみたいなという方も多かったので、キッチンだったりとか、そういう設備をつくっていこうというので、ほっとアンドハウスを始めました。

さらに物質的な提供にとどまらず、アンドクラスという形で、おっちゃんたちのいろいろなことに役立つ支援講座も始めてみることにしました。大きく日常支援と就労支援とに分かれるわけですけど、例えば日常支援でユニークだったのが、落語家さんを招いて体験落語をやってみようということで、単に人と話すという機会がない方に対して、人前で話す機会ではなくて、落語を通じて人を笑わせてみる体験をしてもらったらどうなるんだろうみたいなことだったり、あとは調理実習をみんなでやったり。

ちょうどこの方も当時はホームレス状態にあったんですけど、この写真を見てわかるとおり、日曜のいいお父さんだなという感じの写真で、すごくこれでほっとしたとおっしゃっていただいて。久しぶりに料理をつくってみて、昔の感覚を思い出したとおっしゃっていただいて。

この方なんか路上で生活されているときに、寝られないとおっしゃっていたんです。そういう中で、3 カ月ほどうちで働かれて、おうちを借りられるようになって、私、聞いたんです、おうち借りた翌日に。どうでした、寝られましたかと聞いたら、おっちゃんが、8 時間も寝ちゃいましたと答えてくれたのがすごくうれしくて、今度家を汚しに行きます、焼き肉パーティーだと思って行ったらあまりお金がなかったので、鍋パをしているときの写真です。

そういう形で、おっちゃんたちとの交流も、このアンドクラスを通じて育みながら、また季節を感じてもらえるイベントもいいんじゃないかなということで、1 月には餅つき大会をやったりとか、4 月にお花見、7 月に流しそうめん、バーベキューとか、そういう季節ごとのイベントもつくっていくようになりました。

おっちゃんたちもお金を稼ぎはするけれども、その稼いだお金を何に使ったらいいのかわからない。結局、昔の癖からギャンブルするしか、パチンコしか、わしの相手おらんわみたいな感じでパチンコに行ってしまう。アルコールにお金を使ってしまうとなってしまうので、何かアンドクラスを通じて関係性を良好にしていって、そして適切にお金を使う場所、こういうのにお金を使ったら気持ちいいんだって、そんなふうに体感してもらえる機会を提供できたらなと思っています。

さらにおっちゃんたちの中で、路上生活自体が過酷なこともあって、おなか痛いんやけど、どうしたらいいんやろうとか医療的な相談も受けるようになりましたので、ヘルスサポートひなたの皆さん、訪問看護ステーションの皆さんにご協力をいただいて、定期的な健康相談会もホームドアでするようになって、そういったものを通じて、無料低額診療につなげていったりだとか。あとは写真が違うんですけれど、カットモデルという形で、大阪理容協会さんにご協力いただいて、カットモデルのバイトも提供したりだとか。そういう形でおっちゃんたちのニーズを聞いて、こんなのあったらいいなというのを実現していこうというのをしていったわけですね。

そういう中で、次に思い至ったのがシェルターといいますか、住まいの提供を何とかできないものだろうかと思ったんです。非常に個人的な話にはなるんですが、私が高校 2 年生のときに描いた絵でして、とりあえずあそこに行ったらその日から住める個室があって、その日から働ける場所があって、その日から栄養のとれる温かい食事が提供される。そういう場を提供できないものだろうかということで、高 2 のときに絵を描いたんです。これを実現したいなと思い至りました。

この絵どおりに全くいくわけではないですけど、やっぱり今の日本って、お金がなくなった、おうちを追い出されたとなったら、みんな駆け込むのがネットカフェだったりとか安いホテルだったりするわけです。実はネットカフェ、ファーストフード店が住まいの最後のセーフティーネットになっている状態でして、そこを変えていきたいなと思っています。とりあえず、あそこに駆け込んだら何とかなる、そんな場をつくれたらということで、まずは 3 部屋。施設とまではいかないですが、3 部屋を提供しようということで、ホムハウスを去年の 9 月から提供し始めました。

そういう中で、続いてホムハウスを提供して、そこを通じて、例えば、家賃何万円のうち何万円を貯金してもらって、その何万円が何カ月かでたまったら次の家が借りられるように、ステップとなる住宅を提供すると考えたんですけれども、そのステップとなる住宅を提供する中で、次の家にスムーズに移行できるような支援は何だろうかと考えたときに、おっちゃんたちにとったら初期費用、大阪だったら七、八万円ぐらいかかるわけです。七、八万円を出すのにも精いっぱいなわけなので、家具とか家電とかを、新居を借りられたお祝いに、私たちからプレゼントできないかなと考えたんですね。

そこで、思いついたのが「モノギフト」というサービスでした。これは良品買館さんという大手リサイクルショップさんが提携してくださって、とりあえずおうちに食品が余っていたり、家具や家電が余っていたり、いろいろなものが余っていたら、うちに物品の寄付をしてくださいというサービスになります。

その中で、ちょうどタイミングよく路上脱出を果たしておうちを借りられたという方がいらっしゃったら、たんすや冷蔵庫はそのままその人へのギフトとなるわけですし、ちょっと今、おっちゃんたちは家を借りる予定がなくてというときだと、一旦、良品買館さんが出張買い取りに行ってく

ださって、そのお金をプールしてもらって、そしておっちゃんが脱出したときに、また家具や家電をそのお金からプレゼントする。そういうサイクルをうまくつくれないだろうかということで、物ギフトを始めていきました。

続いて、就労支援のところです。仕事の提供で、先ほどの HUBchari から始まって、職種の選択肢ももっとたくさんつくっていけたらなと思いまして、民間企業さんと連係して、清掃のお仕事だったりとかをするようになったりだとか、あとは行政との連係で自転車対策事業を、HUBchari が自転車対策だったという関連もあって、業務委託を受けるようになって。これらの委託業務自体は、決して生活困窮者向けにつくられているものではなくて、普通によくある仕事を、おっちゃんたち向けの就労支援の場として開拓できないかということで探してきて、委託業務を就労支援の場としてリメイクしていくことをやり始めたんです。ということで、4 年間ぐらい、のべ 150 名の方がうちで働かれました。

野宿生活中と、うちに相談に来られて生活保護を利用することになって、生活保護を利用後に、またそういう仕事に働いてもらう方もいらっしゃったりだとか、そういった形でご利用いただいています。

また、その仕事の提供とあわせて、最初、基本日払いで、今日は何時間働いたから何円でという形で、事務所でお給料を渡していくわけです。その収入の一部を貯金してもらうことで、ゆくゆくは家を借りるお金に回してもらえるように貯金のサポートをしていったり。さらに、うちで就労支援を受けておうちを借りられた人を対象に、一般企業とのマッチングできないかということで、いわゆる職業紹介事業も始めていきました。

例えば HUBchari で働いていた方ですけど、日系ブラジル人の方でして、やっぱりブラジル人ということで、漢字の読み書きができなかったんです。ただ、非常に勤務態度は真面目で、何とかならないかなと考えていたところ、HUBchari で働いた人を雇いたいという企業さんがあらわれて、無事に仕事を見つけに行くことができたんです。なかなか自力で就職活動をしてもうまくいかない方も一定数いらっしゃる。そういう方を特に対象に、ご理解ある企業さんとつないでいくことを始めました。

最近、この写真を撮りに行かせていただいたときに、ここの企業の社長さんに、どうでした、何々さん、うまくいってますかと聞いたら、そこの社長が、100 点満点で言うところの 120 点かなって答えてくれたそうで、何だかよかったなと思いながらマッチングを進めていったんです。

最後、ステップアップした後にフォローとして、居宅生活を開始して、見守りだったり、定着の支援だったり。また、就職された後も定期的な面談の実施をしたりだとか、あとは大切となるのが緩やかなつながりというか、何か困ったときに、何かあったら戻って相談できるような関係性、緩やかな関係性づくりで、この居場所関係づくりの中で行う交流イベントが、その契機になっているのかなと思っています。

ということで飛ばし気味に話していきます。そういう中で、ソーシャル・ディスアドバンテージが、いろいろ支援の中で見えてきたわけですが、私たちが考える社会的不利において、ここに関しては、基本は先ほどの支援のステップで段階的に解消していけるものかなと思っていまして、あとは下の 5 つです。

例えば障害だったら、私たちも、まだ 5 つに関しては非常に悩みながらやっているところではありますけど、障害者手帳を取得する支援をしていくであったりだとか、あとは発達障害とかを認定してもらえるようなテストを受けに行くのを推奨してみるだとか。あと病気では、先ほどの訪問看護をきっかけに医療につないでいけたらなと考えているのと、あと依存症、ギャンブルとアルコールですけれども、ここは私たちもすごく悩んでいるところで、うちの職員から、ぜひ奥田さんにも意見を聞かせていただきたいという熱烈なオファーがあります。依存症のところは悩みどころです。あと借金は、弁護士さんのサポートを借りながら解消していくところ。

家族に関しては、若い方だと家族とのつながりが非常に大切なところにはなってくるんですけど、年配の方になってくると家族が既に他界されてしまっているとか、家族に頼らずに何とかしたいところもあると思うので、そういった本人の意思を尊重しながら、家族と、もしご要望があれば仲介したりしている状況です。

ということで、具体的にケースとして見ていけたらなと思うんですけれども、というのが、出した 10 個は非常に表面的な、表層的なものだと思うんです。社会的不利が、1 つ 1 つの項目が、個人がそれを抱えたときに、個人それぞれが、社会的にまた、こういうのが困ったと出てくるものだと考えています。

ケースとして、例えば 1 人目、A さん。50 歳で、そもそも広島で自営業をしてはいたんです。45 歳のときに倒産してしまって、派遣の仕事で生計は立ててはいたものの、その派遣の仕事の中で盗難事件が起きてしまって、それを自分のせいにされてしまった。それがつらくてストレス性の胃腸炎になってしまったんです。ただ、この時点で、倒産してしまったことで借金も抱えているし、また、倒産した後すぐのお仕事でこういったことがあったので、なかなか貯金がたまっていなかった。そういうことも重なって胃腸炎になって、また寮つきの仕事だったので家も失ってしまって、ネットでホームドアを検索して、広島から歩いて来られて、メールで相談をされた後、来所される。

ちょうどタイミングよく、結構お仕事があった時期だったので、週 5 日働いてもらって、貯金をする中で、職業紹介で、前に勤めていらっしゃったような飲食店に紹介することができたというケースです。

この方ですが、表象的に見ると、この 8 つが大体当てはまるかなという感じですが、もうちょっと個人的な理由もあわせて深掘りしていくと、そもそもストレスに弱く、過剰に心配してしまうんです。あれ、大丈夫だったかなって。そんな心配しなくていいのにとこっちとしては思うんですけれども、やっぱり本人としては心配をし過ぎてしまう。胃腸炎になりやすい。うちから職業紹介、次のお仕事に結んだわけですが、やっぱりそこでもいろいろな心配が重なってしまうんです。本当に長く続けられるんだろうかということで、こちらとしてもはらはらしてしまうということもあって、ちょっと私たちも、まだどう対応していったらいいのか悩んでいるところではあるんです。訪問看護の皆さんと相談しながら、ここには対応してみたり。

あと、この方で問題になったのは、45 歳で倒産してしまった後に、その方にとって初めての挫折体験も重なったわけなんです。非常に、関西弁で言うと、ぼんぼんなおうちに生まれまして、ご実家が会社をされていてみたいな、そういったご家庭だったので、初めて抱える借金、どうしたら

いいんだろうかというところで。ただ債務問題を抱える方は非常に多いわけで、その中で自己破産を選択せずに、どう立て直すかという計画って、どうやって立てていったらよかったんだろう、そのときにどんな支援があったら、何とかなっていたのかなとも思っています。

あとは行政への不信感。1 度、行政にも相談に行ったけれども、相手にされなかったこともあって、1 度行って水際作戦で窓口の人にはね返されてしまうと、もうだめだ、行政には頼りたくない。非常に信じ込んでしまうところが、結構多くの方にも見られる傾向かなと思っています。そういったところも重なって、最後に自分なんて支援を受ける価値ないんじゃないか。特に行政から、あなたはどうのこうのですよと水際作戦を受けた後だと余計にそれが増してしまうことがあって、もう僕なんかいいです、僕なんかいいですと口癖のようにおしゃってしまう、そういった傾向が見られたのかなと思っています。

2 人目、B さん、60 歳です。職を転々とした後、日雇いをされるようになって、ただ 50 歳で体を悪くされて、働けなくなって、生活保護を利用する。ただ、日雇いだったりとかいろいろな仕事を長くする中で、趣味がない、ほかにやりたいことがないし、生きる目的もそんなにない中で、どうしてもギャンブル代、アルコール代に、そのお金を使ってしまう。そういう中で、家賃を滞納してしまって、シェルターとか救護施設を利用しながら、何とかホームレスにならずに免れていたそうなんです。それもちょっとしんどくなってきたこともあって、友人の紹介でホームドアを知って、就労支援を受けて、先ほど言っていた、おっちゃんたちに提供している住宅に入居されている方になります。

表層的には、この 7 つがざっと当てはまります。もうちょっと個人的なところを見ていくと、やっぱり背景にはギャンブル等の依存症が見え隠れしているわけです。私たちとしても、それをお医者さんに判断してもらうのも難しいわけですし、本人もそれを望んでいるところではなかったりするので、治療につなげる対応が難しい。じゃあ、ギャンブル等によって家賃を滞納してしまったということであれば、生活保護で代理納付の配慮が、かわりに家賃は払っておきますよという生活保護の配慮があったら何とかなったんだろうかというところだったりだとか、あとはこの方に見られるのが、日雇いも経験した中で、その日暮らしがしみついてしまっているんです。別に目標とか希望とかはないんだから、きょう稼いだらきょう楽しいことに使っていいじゃんと、どこかあきらめに似た気持ちをお持ちで、それもあってギャンブルやアルコールにお金を使ってしまうと、それを繰り返してしまっているというケースです。

最後に、若い方、私より若く、25 歳でやって来られた方です。親からネグレクトを受けて。九州の方です。高校を卒業後、福岡の海草工場で 5 年間働くもブラック企業で、退職されて大阪に行けば仕事があると流れついた。ただ、バイトをするにも携帯がなくて、知り合いの番号を書いていたのがばれて、ホームレスは無理と言われて。今度は水商売をするも、賃金未払いで知り合いの家に転がり込んで。ここで 2 つの役所に相談に行ったけれども、若さ、25 歳であることと、家族がいることで相手にされない。所持金が 100 円程度となり、ここが謎なんですけれども、その辺にいる人に聞いたら、ホームドアがいいよということで来所をされて、自立支援センターに入所してもらいながら、うちで働いてもらい、就職活動をして仕事を決めたという方です。

C さんにおいて、まず頼れる家族がいない。ネグレクトを受けてしまったこともあってか、C さ

んの様子を見ていると落ち着きがないんです。何かふわふわしている感じというか、腰を据えてここでやっていくというのがなく、俺はちょっと流浪の民なんでぐらいな感じで、あっち行ってこっち行って。この方も、そういう意味ではその日暮らしというところと、あと若いので仕事は見つかるわけです。住所とか連絡先とかさえ何とかなれば。となると、その人にとっては今の状態が嫌なので、目先のすごい低賃金なバイトとかに飛びついてしまう。その後、路上とバイト生活を繰り返してしまうのから抜け出せない。また、希望や目標がないので、もう一歩どうなりたいのか決めきらないと考えています。

そういう中で10の社会的不利、その後ろに潜む個人的な背景、理由を話してきたんです。最後になるんですけれども、ホームドアを続けてくる中で、一番よく聞かれるのは、どうして川口さんはそんな14歳からホームレス問題にかかわって、10年以上もやっているんですかと言われるんです。私としては、問題を一度知ったら、おっちゃんたちと一度話したら、何か他人事には思えなくなったのが大きなきっかけだったなと思っています。知ったからには知ったなりの責任がある。

やっぱり、14歳のあのときに知って終わりにしたくなかった。知ったからこそ、じゃあ、何ができるんだろうかというのを、おっちゃんたちのニーズを聞きながら、ああしてみたら、こうしてみたらと非常に実験的な部分も含めてやってきたところがホームドアの支援活動になります。まだまだ、非常に小さい小さい団体でして、職員も4人ぐらいしかいない。そういう中で、あくせくやっているわけです。

そろそろお気づきかなと思うんです。今日から皆さんも、問題を知った側ということで、何ができるかと一緒に考えてもらえたらうれしいなと思ったら、スライドが変わったんですが、第3回相談ボランティア募集で、少ない職員を、ぜひ一緒に支えてください。4人でやっているのに、年間相談者が200人来ているわけです。お察しいただけるかなと思いますが、ぜひ皆さんも私たちの一員になってくれたらうれしいです。ちなみに締め切り2月22日です。きょう、何日でしたっけ。

○司会　今日は21日です。

○川口　なぜなのか。うちの事務局長の陰謀で、今日集めてこいよということで、22日締め切りにさせられているわけですけど、ぜひ、皆さんも相談ボランティアになっていただけたらなと思います。よかったら、配付資料に詳細入っておりますので、ぜひご覧ください。今、7名いらっしゃるんですけれど、15名にするのが目標で、私たちの仲間に加わっていただけたらうれしいです。

ということで、ご清聴どうもありがとうございました。

○司会　ホームドアの川口さん、ありがとうございました。

今から簡単な質問だけを受け付けたいと思うんですけれど、何か出ますでしょうか。

今日は支援の内容についてのお話もあるんですが、できればこの後、組織論、どういうふうにして、こういった組織を運営しているのか。先ほど、私たちの活動を4名ほどのスタッフでやっていますと、でもお話を聞いたら相当大きな、さまざまな事業をやっているということで、どういうマジックが働いているのかなと思うわけです。

かなりボランティアといった存在に頼る部分もあるかもしれませんし、また支援対象者であった当事者の方、こういった方々がホームドアの活動に参与していく動きも見られるのだろうと思います。どういうふうにして、限られた財源の中で、必要な事業を行っていくのか、このあたりは後の

ディスカッションの中で、皆さんと一緒に考えていきたいと思っておりますので、積極的なご発言をお願いします。

続きまして、奥田さんにご発表いただきたいんですけれども、少し準備に時間がかかると思います。

この間に、簡単に今日の話の対象になっているホームレスの状況について、この十数年の動きの説明をさせてもらおうかなと思います。

ホームレス問題はいつぐらいから日本の中で社会問題化したか、皆さんご存じでしょうか。ホームレス問題が日本の中で社会問題化したのは、1990 年代の中ごろだと言われています。バブル経済が崩壊してから、しばらくたってホームレスと言われる人たちが路上にあふれるようになってきた。特に、それは都市部において目立つ問題なんです。大阪と東京がホームレス問題が最も深刻だった場所と言われています。

では今日、そのホームレス問題はどういうふうになっているのか。2003 年にホームレス全国調査が厚生労働省によって行われました。そのときには、全国で 2 万 5,000 人ぐらいのホームレスが確認されたんです。実際には、もっと多かったと言われているんですが、一応、目視、目で見た調査では 2 万 5,000 人ぐらい。その後、ホームレスの数はどんどん減っていくんです。

というのは、今日奥田さんからチラシをいただいたんですが、ホームレス自立の支援等に関する特別措置法、延長についての要望書が入っております。この法律が 2002 年にできたことによって、ホームレス対策が全国規模で進められるようになりました。それにより、自立支援センターという施設ができたりとか、そういった中でホームレスの就労自立に向けた支援が進められたり、また就労自立が難しい、そうした方々に関しては生活保護という制度を積極的に活用して、路上からの脱出を図る取り組みもしてきました。

こうした中で今日、全国のホームレス状態の人たちの数は大幅に減っておりまして、6,500 人ぐらい。かつて 2 万 5,000 人ぐらいあったのが、今は 6,000 人程度、4 分の 1 ぐらいに減っています。これは大事なことです。ホームレス問題は、数という面で見れば大幅に解消傾向にある、大幅に減っているということです。

先ほどお話があった大阪の事例ですが、大阪も同じように 2003 年のときには 6,000 人ぐらいホームレスの数がいましたが、今は 1,500 人ぐらいに減っています。同じように 4 分の 1 程度。これから、もしかすると奥田さんからも北九州市のホームレスの動向について説明があるかもしれませんが、2003 年に最もホームレスが多かったころ、400 人程度いたんですが、今日では 100 人程度に減っている。ホームレスの数が減っているのだから、問題ないんじゃないのと思うかもしれないけれども、今日のお話の中で、やはり継続的な支援、寄り添いを続けていく中で、簡単には問題が解決しないということです。新たな問題がその中からどんどん見えてくる、そういう様を皆さんと一緒に考えていければなと思っております。

それでは、NPO 法人抱樸の奥田さんより、報告お願いします。

○奥田　皆さん、こんにちは。抱樸の奥田です。

川口さんたちの活動は、九州にも響いておりまして、大阪にすごい人がいると、すごい団体があ

るということを聞いておりました。

前に 1 回、大阪女学院でニアミスしたことがあって、お話する機会は余りなかったんですが、今日初めてお話をゆっくり聞けて、すごいなと思って。ボランティア応募しちゃおうかなと思ったんです。

川口加奈さんが生まれる前からうちの北九州の活動は始まっていまして、1988 年の 12 月で、川口さんが生まれられたのは 91 年と今日のチラシに書いていたんで、うちの息子と幾つか違いなんです多分。だから、娘みたいな年の方ですけど、すごいなと思って聞いていました。

私たちは長くやっていまして、来年で活動開始 30 年になります。最初は 1 日も早い解散を目指し、頑張りますと言ってやったんです。こんな団体ないほうがいいやと。でも、今から 5 年ほど前に、名前を抱樸に変えるんですが、多分、日本の社会を見ていると解散できないなと。どうも困窮者の支援のイメージがマイナスを埋める、まさにディスアドバンテージな状態になったものを戻すという感じですけれど、多分それではだめで、ホームドアさんがされていることもそうだけれど、何か新しい仕組みだったり、新しい社会のイメージだったり、人の出会い方であったり、働き方であったり、マイナスに落ち込んだ人をゼロまで戻すんじゃなくて、どう生きるのか、その先の話が始まっているんだろうと思いました。

我々も最初のころは、家のない人には家を、仕事のない人には仕事を云々とやっていた。食べる物がない人には食べ物をで、今も毎週金曜日に炊き出しをやっています。そんな当たり前のことは議論するまでもないです。そういうものは当然のこと。昨日も言ったんですけれども、私は憲法学者ではありませんが、国の、厚労省の議論の中に入って議論を聞いていると、今この国は憲法 25 条のレベルでみんな議論しているんです。すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国はこれを保障するんだと、そういうことなんです。最低限の話を一生懸命しているわけです。

しかし、最低限の話は本来議論するまでもない普遍的なものであって、これは当然のことである。人が住むとか、食べるとか、もしくは病気になったら医者にかかれるなんて当たり前のことです。我々は、憲法 13 条の問題に踏み込もうという話を、この数年前からし始めて名前が変わったんです。ホームレス支援機構から抱樸に。

憲法 13 条は、すべて国民は個人として尊重される。新しい自民党草案では、すべて国民は人として尊重されると書いている。これ、大分違うんですね。「個人として尊重される」のと「人として尊重される」のは、いろいろ取り方あるでしょうけれども、大分違う。その後に何を書いているかというと、幸福追求の権利を持っていると書いている。憲法 13 条は幸福追求権なんです。いかに個人として、それぞれの幸福を追求していくかが、本来のテーマであると思うんだけれども、今、何か議論の中心は 25 条へ行っていて、生きる死ぬのレベルでみんな議論していて、ナショナルミニマムって何なんだみたいな話をやっていて、とても幸福追求の上まで行かない。

家でいったら基礎工事が 25 条で、本当はその上に家を建ててやっと住まいになるんだけれど、家が建つところまでいかない、13 条の議論をしない。そんな時代の中で先ほどのご報告を聞かせていただいて、これはマイナスを埋めていらっしゃるんじゃなくて、新しい世界をつくろうとしている活動なんだなと思いながら、すごく感激しながら、しかも、よくやるなと思うのと、わかりや

すいなと。おじさんは一生懸命つくってもこんな程度ですから、あきませんわ。

最初の写真は、1 年に 1 回、自立したおじさんたちと、おじさんだけじゃないんですけれど、女性もいます。ホームレスを脱した方々と、ボランティアとうちの職員で、1 年に 1 回運動会を開いているんです。一日中、運動会をやっていると倒れちゃうんで、午前中は運動会で、午後は文化祭で、最後は全員で炭坑節踊る、わけのわからない宗教集団みたいになっています。これは 2012 年の写真ですけれど、この間の 10 月にもやりまして、今年は 350 人ぐらい来ていまして、楽しく過ごしています。

問題は野宿からの脱出ではなくて、その後どう生きるのか、13 条の課題なんです。そこのところをどう寄り添えるか。寄り添うという言葉は余り好きじゃなくて、伴走型支援と言っています。うちの団体は長いことだけはやっているんです。29 年目になります。来年 30 周年になって、既にホームレス支援団体とは言いがたい、いろいろなことをやっていまして、子どもの貧困対策とか世帯支援もやっていますし、障がい福祉事業もやっていますし、介護事業もやっているんです。5 つの施設を運営していますので、さまざまです。

路上からの人だけ見ると 2,800 人が自立していまして、二十何年やっているので、お亡くなりになられた方もたくさんいて、私が幸か不幸か牧師なので、最近はお葬式ばっかりやっている。最初のころはボランティアでやっていたんですけど、自立者の会という互助会ができまして、このごろではその互助会が全てお葬式は仕切る、自分たちで自分たちの葬儀は出すんだと。私が葬式をすると 1 回 5,000 円くれる。しょっちゅう亡くなるので、いいバイトになっていますよ。要らねえと最初は言っていたんですけれど、それは彼らの誇りというか、俺たちが葬儀を出すんだと、そこが大事なんですね。だから 5,000 円いただきます。このごろは、ちょっと安いんじゃないと言ってますけれども、お坊さんだったらこれでは済まんよと言っているんです。お坊さん、いたらごめんなさいね。そんなことないですよね。釜ヶ崎の川浪さんならただでもやるでしょう、多分あの人は。

自立達成率は 6 カ月の自立プログラムで、うちは中間施設プラス居住支援ですので、大体 6 カ月で 92% ぐらいが自立します。自立の継続率、地域生活の継続率も 92% です。就労自立率 58%、約 6 割が就労していく。高齢者も多いですし、後で出てきますが、実は 4 割以上が知的障害を持たれていることとか、依存症の問題等も抱えておられる方が多いです。

4 つの市で活動していまして、5 つの施設。総定員は 186 室です。基本的には 6 カ月で地域に。地域が最大の受け皿だと考えていますが、もう二十数年やっていると、1 回地域に出た方が、終の住みかというか、なるべく住み慣れたところで最期までということで、今は終の住みかという形の施設も運営するようになりました。

職員は、これはめちゃくちゃ多くて 104 名。今年春の採用組を入れると 110 名になります。4 人であれをやっていると聞いて、うちは 100 人で何をやっているんだろうと思って、びっくりして、さっき。1 人ちょっと貸してと言いたい。うち 10 人。1 対 10 でバーターすると、多分、20 人ぐらい働くんだろうなと思って、すごい人たちだと思って見ていました。

有給職員は 104 名ですけれども、非正規雇用と闘ってきたこの二、三十年だったので、基本的には職員は 7 割が正規雇用でやっているんで、社保つき、ボーナスつきでやっているので、もう大変でございます。

全体で、こういう組織図になっていて、全部で 17 部署もありまして、なかなかどこで何をやっているんだかが共有できないような状態で、メーリングリストで毎日の日報で共有するという話です。日報を読むだけでも、十何部署あるので、私は全国どこにいても、それをチェックするのが仕事みたいなもんで、そこから気がついたことは、即各担当者に連絡したりもします。

うちの人たちで無作為に 50 人をピックアップして、この間、国に、「奥田さん、ホームレスの実態どんな感じ」と言われたから、こんなのもつくってみたんです。

まずは生育的な問題を抱えている人、50 人中何人かということで、例えば 29 人、約 6 割は、小さいころから知的障害を疑われていたみたいな人たちがたくさんいた。2 つ目が低学歴とか、もともと不安定就労層が多い。成人後に発生した困難。この辺がディスアドバンテージの話になってくると思うんです。このあたりで精神疾患を発症したとか、アルコール依存症等々があります。

さらに孤立の割合ですが、46 人、ほぼ 9 割が答えているのが、相談できる人がいなかった。野宿状態になる前に、相談できる人がいなかったのが 9 割になる。一番最後のこれが結構おもしろい、おもしろいというか、福祉制度の利用がない。今まで福祉等、年金とか生活保護も利用したことがない人が全体の 50% です。このデータって逆にしたら、生活保護とか年金制度等につながっていた人が 5 割いたということです。そういう制度につながっていたのに野宿になっているということは、既存の制度だけでは、どうもホームレス化を阻止できてないという話になった。

厚労省は一番ここに注目して、なるほどねと。年金とか生活保護をもらっていたのに、ホームレスになっている人が 50% いた。これって問題だよねという話になりました。法人でやっているのが、ホームレス、生活困窮者、子ども、世帯で、いろいろな事業でカバーしていきます。30 年間で、最初は炊き出しから始まって、だっと事業がふえていって、今、一番最近では、北九州市のとなりの中間市で生活困窮者の自立支援事業を始めたということです。

ホームレスの人たちに対する自立支援の流れはこんなもので、中身はいちいち説明できないですけれど、注目していただきたいのは、皆さんから見て一番右側。つまり、地域生活に入った後のサポートのメニューが非常に多いということです。自立段階から自立支援センターとか自立支援住宅に、もしくは直接居宅もやるんですが、その中間施設で就労支援等をして、いよいよ地域へになるんですが、実はそこまではたった 6 カ月なんです。その地域へ出てからも支援は終了しない。出会いからみとりまでで。知ってしまった責任とかおどされていましたけれども、皆さんね。うちも出会った責任といってきて、出会いからみとりまでやる。

そうなると、相談、中間施設、自立という、この自立のところが延々と続いていくわけです。そうなるとサポートが、今こんな感じで、自立継続率等々、次に書いていますけれども、就労の支援から何から、生活サポートチームがあって、ここに公費が出ないことが問題です。ここの費用の手当ができない。本当はいちいち、例えば、病院同行したので、はい、500 円と言いたいですけれども、それはなかなか難しい。実際には、お金はそうない人たちなので。このあたりをどうカバーするのかというのは、実は大きな課題になっています。

一番下に、貴重品金銭管理なんてあります。依存症の方も多いので、全て本人同意の上に行います。全て契約概念です。ご本人との間で、どう契約を結んでいくかということでやっていきます。

自立支援センター入所者のうち、1,108 人の対象者のうち、就労自立が 571 人、約 6 割が就労自

立している。生活保護は 3 割いかないぐらいです。ほぼ就労で出ているという感じであります。約 1 割が自主退所になります。強制退所はありません。多分、日本で唯一の自立支援センターで強制退所がないセンターです。最初に強制退所はやらないと決めて、自分で出ていく人はしようがない。何度来ても受け入れる。でも、出ていけということは絶対に言わない。

難しいケースも確かにあります。うちの支援員によく言うのは、引き受けられないけれど、切らない。何とも言えないスタンスなんです。やっぱりおじさんによっては、ちょっと、これ引き受けられんなという人もいるんですけれども、引き受けられないけれど切らない、そんな変な関わり方もある。だから、こっちから来るなというのはしないです。

先ほど、帳票類をデータ化されたという話ですけれど、うちは、実は最初のころからデータベースをつくっていまして、本人同意のもとに、路上段階のデータが 3,747 人分、自立支援センター等を使われた中間施設でのデータが 1,173 人分。今、小倉地区だけでも生活している人のデータが 1,010 人分。これが福岡チームと八幡チームと 3 カ所あるので、今、全体で 2,000 人ぐらいの生活サポートが続いているということで、大体 8 人のスタッフでやっています。8 人で 2,000 人の生活サポートをやっているので大変です。

データベース自体は、最初マイクロソフトのアクセス使っていたんですけれども、なかなかアクセスも限界があって、入れ過ぎると大変なことになるんで、地元の大学の先生と共同でデータベースソフトの開発もして、これは支援者向けのソフトで、例えばこの人とはもう 1 週間連絡とれていませんよというと、ソフトから赤点滅で教えてくれるみたいな、そういう支援者をサポートするようなソフトを開発をしています。

あと北九州市とは、私、長いことけんかしていました。最初の 10 年ぐらいは殺人行政というチラシをまいて回っていたので、余り喜ばれませんでした。最近、最近というか十何年前に仲直りして、そして市がいよいよ、ホームレス自立支援法が通ったんで腰を上げたんです。一番、皆さんから見て左側がホームレス対策、対策ですよ。対策推進本部。これは 12 局ほどある局の中で、11 局が集う巨大なチームが市庁舎内にできた。私としては、こっち側です、皆さんから見て右側。「北九州におけるホームレス問題を解決するための市民協議会」という協議会をつくって、この市民組織と公がつくった対策本部との間に「ホームレス自立支援推進協議会」をつくって、全体、市全体のホームレス対策計画を立てていくという構図を十何年前につくりました。

2000 年に NPO を立ち上げたときに、最初は総合商社型 NPO をつくると私は言ったんです。NPO の中で、すべての部門をつくっていく。例えば不動産部門、医療部門。本当に診療所開設計画までつくっていたんです。そして福祉系の施設とか。全部やろうと思ったんですけれども、途中でやめた。なぜかというと、不動産業を今さら私らが勉強するよりも、プロフェッショナル何ぼでもいるんだから、その人たちに動いてもらったほうが絶対いいということで、市民協議会の中に就労専門部会とか、住宅専門部会とか、専門部会をつくりました。就労の場合は就労先になる協力事業者の会、当時 20 社ですけれど、今は 100 社ぐらいになっているかな。

あと住宅のところは不動産屋さんの会です。北九州の不動産屋さんが 40 社、福岡が 10 社で、基本的には、不動産業の方に福祉的なセンスを持ってもらおうというのと、うちとの連係をしてもらおう。自立される方々って、年間に多いときで 300 人超えていましたから、大体 1 人の仲介手数料

等を入れると、最低でも 5 万円以上ぐらいの収入になる。そうすると 300 人紹介すると、この方々に 1,500 万のビジネスになるわけです。それで保険とか何とかやっていたら、さらに収入になる。

ウィンウィンというか、彼らにとってもプラスになるのは何なのか。あと、法律家の会とか。うちが独自でやったのが自立生活サポートセンターで、これは NPO でやります。これは、先ほど言いました自立後の支援ですね。

ですので、当初は地域資源と隣に伴走支援員がついて、つなぎもどしの連続的行使を伴走型支援でやるんですが、当然、資源が足らないので、どんどんと資源をつくっていって、いろいろなものになりました。例えば、皆さんから見て左の下にある保証人バンクは家賃債務保証制度です。保証会社の審査に通らない人がたくさんおられるんで、NPO で保証人事業をやりましょうということでやりました。

この事業の特徴は、事故が起こっても求償権を行使しない。求償権ってわかりますか、損害賠償権。保証人になっていますから、大家さんに家賃を代わりに払うんだけれども、そのかわり本人は訴える。これはほとんど無駄なことなんです。本人を訴えた瞬間に路上に戻りますから、裁判にもならないです。だったら、最初から何が起こっても訴えません。そのかわり裏切らないでねという、そういう仕組みをつくって。ただ、そんな口約束だけではもたないので、この保証人制度で入ってくるお金の中の 3 分の 1 を保証のための積立金。3 分の 1 で、いわゆる NPO バンクをつくったんです。自立のために利息なしで貸し付けられる制度をつくって、事故があったら、やる気のある人はそこからお金を借りて、カバーを自分でして、その分を借金返していく。もう一つの仕組みをつくったことで、事故率はほぼ 1% にもなりません。

さらに居住の支援ですけれど、中間施設を経て、地域で自立居住をするんです。ここでみんな頑張っていくんだけれども、基本的に私が出会った人たち、私たちが出会った人たちは、余り自分から進んで助けてというのが得意じゃない。どちらかというと頑張り屋さんで、俺、後でええわみたいなタイプが結構いたんです。だから、ここをずっと放っておくと、ぎりぎりまで地域で頑張っちゃう。そうすると、最後で一気に介護系の施設か病院に行く。しかも、これがなかなか高度な施設になると入れないので、遠隔地に行っちゃう。住み慣れたところで最期まで過ごしたいのに、遠隔地に行く。しかも、社会的コストでいうと結構ハイコストな話になってしまっている。

さらに、サポート付きの地域見守り居住というラインをつくって、ここにサポート入れたんです、サポート契約して。

さらに、そこでもなかなかもたないと、ひとり暮らしが難しいという話になったときに、抱樸館という、いわゆる生活支援つきの共同居住という施設をつくって。看取りまで行う。真ん中のケアつきの居住をつくることで、なるべく住み慣れた地域で最後までいこうという話と、実は社会的コストでいっても、最後の最後に高度な介護施設が出てくるので、こっちのほうがいいんじゃないかということで、今いろいろなところに話をしています。

抱樸館という、一番最近建った施設がこれです。自分たちで、1 階はレストランで地域の人も出てくる、出てこい食堂という別名もついている。入口にカードリーダーがあって、ぴっとやったら点数がたまるんですよ。50 ポイントたまると 1 回飯が食える。それは何かというと、結局、介護のお弁当って家に届くから便利だけれども、家から出なくなっちゃうんで、ここには食べに来てく

ださい。そのカードリーダーが生活サポートとつながっていて、例えばずっと来ている人がぽんと来なくなったりするとサポートを入れるという仕組みも。

館内でデイサービスをやって介護事業収入を得ることもやっています。上は第 2 種福祉事業で、いわゆる無料低額宿泊所。無低は全国的にブラックという印象が非常につけられてしまっているんですが、これ無低です。今、国の関係者とか、いろいろな政党が、うちに見学に来ていますけれども、私は日本で一番いいホームレス支援施設だと豪語しているんです。こんな施設もやっています。

次は、理念的なことを言います。事業もいろいろあるんですが、やっぱり、私は NPO って理念が一番大事で、いつもそこに戻れるかが大事だと思うんです。きょうのご案内の文章にもありました、2 つの困窮だと二十数年前から言い続けてきました。1 つは経済的困窮である。もう一つは社会的孤立である。我々は、それをハウスレスとホームレスと呼んできたわけです。

今、自立、自立と言うけど、最近「自立と参加」と言います。だけど、私たちは「自立と参加」じゃなくて、「参加と自立」だと言いました。社会に参加した人が自立できていく、していくんだ。だから、自立していないと社会参加できないんじゃなくて、どんな形であれ、社会参加が先だと考えてきました。経済的困窮と社会的孤立をハウスとホームという言葉の使い分けにして、長くやってきたんです。ハウスレス問題は、経済的困窮。家がないから始まって、さまざま経済的なものがない。でも、自立されて、家に入られて、就職も決まって、訪ねていくと隔世の感があります。路上のときがうそみたい。きれいになっていますしね。真っ黒けのおじさんが、何か、ちょっと美白になったりしているわけです。ええと思うんです。

頑張ってください、また今度来ますわと言って、今度お土産持ってくるわとか言って、帰るときに、ふっと部屋の中を見ると、身ぎれいにされているんだけれども、路上で、駅の通路で段ボールの上に座っておられた日の姿にかぶって見える。何が解決できて、何が解決できていないのか。

そこで残っていた問題は、ひとり、ぽつんとという問題だったということです。路上では、畳の上で死にたいとおっしゃっていた方が、実際に部屋の中に入って、これで安心と言われるかというと、そうでもなくて。俺の最後は誰が看取ってくれるんやろかという話になる。そこにあったもう一つの問題は、ホームの問題で、社会的孤立、関係のなさ、そこが大きな問題だった。経済的困窮、ハウスレスに対しては、この人には何が必要か。もう一つの関係の困窮、ホームレスに対しては、この人には誰が必要かということで、やはり人勝負だというところが非常に大きいと思います。

もともと、このことを教えてくれたのもホームレスのおじさんで、二十数年前、活動が始まってすぐに、中学生が夜中にホームレスの人を襲いに来る、そういう事件が起こりました。ひどい襲撃事件だったんですが、そのときに襲われたホームレスの方が、私にこうおっしゃったんです。1 日も早くやめてほしいけれども、中学生が夜中 1 時、2 時に、自転車に乗ってホームレスを襲いに来る。彼らは家があっても帰るところがないんじゃないか。親はいるけれども、誰からも心配されていないんじゃないかと。帰るところのないやつの気持ち、誰からも心配されていない人の気持ちは、俺はホームレスだからわかるけれどなとおっしゃったんです。

私たちはこの言葉を聞いて、ああ、そうかと。中学生とホームレス、全然違うと思っていたけれ

ども、ハウスレスではないけれども、中学生はホームレスだったんだ。親はいるけれど誰も心配していない、それをホームレスと言うんだと路上のおじさんから教えてもらったということでありました。

この問題は、その後、日本中に拡大してきまして、確かに路上人数は減っている。私は厚労省のホームレス実態調査の研究メンバーです。国の調査って。1 回調査の指標を決めると、それをずっとやらないかん。もはや路上にいないんですよ、ホームレスの人。現代は不安定居住層の問題に移行しているのに、それでも路上の固定層を調べているわけです。

だから、先ほどホームドアさんが、比較的若い人で、ネットを見ていてつながってくるとか。それは、かつてのホームレスのイメージからはかけ離れた入口になっているわけです。けれど、実態はそっちにあるわけですね。これは国の調査にはほとんど上がってこない。だから、全国で幾ら 6,000 人だ、7,000 人だと言っても、実は見えない人たちがいる。私が代表やっていますホームレス全国ネットワーク、全国のホームレス支援全国ネットワークが 3 年前に調査した独自調査では、生活保護下も含めて、家がないという状態で、居宅設置した人が年間 4 万 1,000 人。うち 50% 以上が、1 日もホームレスしたことないと答えているんです。これってすごいでしょう。

だから、ホームレス自立支援法第 2 条の、この法律は、駅とか河川、道路、云々で、家なく起居する者と書いているんですが、一言で言ったら、外で寝ている人という規定が日本のホームレス法なんです。これが一番の問題なんです。そうすると、ターゲットがずれてくる。ホームドアさんは、果たしてホームレス支援団体なのかという話は、多分、自分たちの中でもいろいろあるんじゃないですか。この人たちをホームレスと呼んでいいんだろうかと。どちらかというと生きづらい人たちだとか、社会的なコンタクトがなかなかうまくいっていないとか、そういうこともあるんじゃないかと。

OECD の相対的貧困率ですが、日本とアメリカを比べると、2012 年段階で日本が 16.1 で、アメリカ 17.1 ですよ。ほとんど変わらないんです、貧困率は。アメリカと日本。私はアメリカのほうが随分高いと思っていました。

もう一つ見てください。こっちは社会的孤立調査ですね。日ごろ、誰ともつき合わない、めったにつき合わない率。アメリカは 3.7%、誰ともつき合わない、めったにつき合わない。日本は 17%。何と日本とアメリカを比較したら、日本のほうが 4.6 倍孤立しているという調査結果です。これも意外でしょう。アメリカ人のほうが、アメリカのほうが個人主義でばらばらなんじゃないの。日本は、血縁だ、社縁だ、地縁だ、家族だ何とかだと言っているから縁が深いと思ったら、全然違うんです。

そうなると、やはり 2 つの問題が日本はベースになっていて、アメリカは金はないけれど友達がいる社会なんです。日本は金もないけれど、友達もいない社会なんです。そのときにどういう仕組みをつくるかということで、このお金という問題と友達という問題と、この 2 つを同時にやれるかというのが今の課題で、多分ホームドアさんはそこをうまくつなげていらっしゃるから、うまくいっているんじゃないかなという気がします。

さらに、この 2 つの課題は、スパイラル化しています、当然。金がないと縁がなくなる。金の切れ目が縁の切れ目です。経済的困窮は社会的孤立を招く。北九州市の全世帯の高校進学率と生活保

護世帯の高校進学率ですが、生活保護世帯の場合 10 ポイント落ちるんです。明らかに、お金の問題が高校進学という社会参加を狭めているという話です。

次のこのグラフは、皆さんから見た左下を見ていただくと、正規、非正規の年収の差なんです。男性だけ見ていただきますと、男性の正規雇用の年収平均は 521 万円。これが非正規雇用になると 226 万円。女性の正規雇用の平均年収は 350 万円。男女でこれだけ差があります。女性の活躍を言っているわりにはね。

こっちのグラフを見てください。こっちのグラフは一番上のブルーのラインは正規雇用の男性です。一番端っこが 30 歳のライン。何かというと、正規雇用の 30 歳の男性が結婚している率が 57.1％。赤のラインが非正規です。非正規の男性が 30 歳の時点で結婚している率が 24.9％。正規、非正規で、結婚しているのが、30 歳の男性の場合、半分以下に落ちるんです。明らかに金の切れ目が縁の切れ目で、お金がないとうまくいかないのはこのことなんですね。

ただ、経済的困窮が社会的孤立を招いていることのみならず、逆もまた真。私は、こっちのほうに力を入れて力説しているんですが、逆です。今度は、縁の切れ目が金の切れ目。この後、紹介したい、生笑一座というホームレスのおじさんたちの一座があるんです。生笑というのは、生きる、笑うと書いて、生きてさえいれば、いつか笑える日が来る。これで全国、今、公演に回っているんです。すごいでしょう。元ホームレスの一座ですよ。

そのメインの方が西原さんといって、野宿歴 11 年。空き缶集めでやってきたおじさんです。この間、小学校に行ったときに、小学生が西原さんに、おじさん何でホームレスになったのと。いいですね、子どもってストレートで。大人だったら失礼だし、余り聞かない。その前に、ええっと人生というものはとか言って、遠回りして、最後に何でホームレスになったんですかと聞くんだけれど、ストレートですよ。

大体、野宿の一座っていいんですよ。大体、小学校に来る人って、スポーツ選手であったり、社会で成功した人が来るじゃないですか。我々はホームレスでしょう。行くと、子どもらもみんな、なめきって、「今日はホームレスか」みたいな顔して、みんな待っている。それでもしゃべるんです。死にかけた話をするわけです。子どもに響くんですよ。後々、感想文に子どもが、私は何度も死のうとした。けれど、生きていたら笑えると、今日聞いたから、もうちょっと生きようと思うみたいなことを言ってくるんです。この一座に入る条件は 2 つだけ。1 つは元ホームレスだった。子どもたちは誰もいない、条件を満たすやつ。2 つ目は、1 度以上死にたくなった。もう死んでしまいたいと思った。2 つ目の条件はクリアする子どもがいるから怖いよ、今。

西原さんは、仕事がなくなってホームレスになったって答えるんですけれども、そうかと子どもが言った瞬間に、いや実はといって、こういうことを言ったんですよ。今から三十数年前、結婚した。子どもができた。子どもが 2 歳のときに、妻が、「父ちゃん煙草を今から買いに行ってくるわ」と夕方出たというんです。西原さんは、「あれから三十数年、いまだに帰ってこないんだよな。うちのお母ちゃん、どこまで行ったんだろうな」、と言うわけ、子どもの前で。それで、子どもたちはげらげら笑っている。

しようがないから 2 歳の子どもを実家に預けて、おばあちゃんが育てながら、西原さんは長距離トラックの運転手するんです。やっているうちに、子どもが 17 歳になったときに、今度はおばあ

ちゃんが病気で亡くなっちゃう。長距離トラックの運転手だから、時々しか帰ってこない。帰ってくるたびに家がどんどんごみ屋敷になって、数年後に今度は息子の姿が消えるんです。息子にも失踪されちゃう。

西原さんは子どもの前でこう言ったんですよ。もう、その日どうでもいいやと思ったと。給料が全部、自分の小遣いに見えた。だから好き勝手なことやって、家賃払えなくなって、その 2 カ月、3 カ月後に家を出た。ホームレスになった理由はそこだと、はっきり言ったんです。

つまり、人が何のために働くか。答えは、人は何のために働くかじゃなくて、人は誰のために働くかなんです。働く意味をつけているのは、実は人なんです。人との関係がなくなるときに意味づけがなくなる。だから、縁が切れると、社会的孤立になると、経済的貧困状態になりますよ。逆もその真。ハウスレスがホームレスを生み、ホームレスがハウスレスを生む、この円環が今起こっているんだ。ここをどこでとめて、この両方を一気におさめるかが大事なんです。

野宿の人たちは、自分の食べ物のことを餌と言います。大阪のホームレスも、多分、餌というんじゃないですか。九州のホームレスは、「餌をとり行ってくるわ」と言っています。僕は人間のご飯やから、餌と言わないでと言うんだけれども、残飯あさっているから餌やわと言うわけです。けど、炊き出しで渡す、私たちの渡したものを、私がこれは何？と言ったら、これはお弁当と言うんです。餌とお弁当の違いは何なんですかね。

このあたりが、物の支援とか、制度の支援ではおさまらないことなんですね。食べ物という「物」だけで考えたら、正直、捨てられたコンビニの弁当と、うちの配っている、ボランティアがつくった手づくりの弁当って、余り変わらないです。もっと言うと、コンビニ弁当のほうが、ちょっと豪華だったりするわけ、腹立つけれど。だけど、食べ物という物としてはかわらないんだけれど、物に人がかかわることで、物が物語化していくんです。

その物語の中で、もう 1 回生き直すのがこの支援の一番の中心で、先ほどのケースの話、川口さんのを聞いていると、やっぱり物語っているわけですよね、その人の人生とつき合う中で。これは大事なんですね。物を物語にしていく。この物語をつくれるのは人しかいないです。だから、ボランティアを募集せないかんのです。どれだけお金があっても、どれだけ制度を整えても、こればっかりは人間でないとだめなんです。

いずれ、AI がどうのこうのいったら制度なんてなくなるかもしれません。ボタンを押したら、はい、これとなるかもしれない。でも、この物語化だけは人間でないとだめだ。それは人なんだと。そこには、人のかかわりというものがどうしてもいる。

このごろ、母子家庭とかシングルマザーの支援もよくやっているんですけれども、ほとんどのお母さんは生活保護をとりません。頑張っている、ダブルワークで。いっとき、「食育」と言っていたでしょう、食べる教育。子どもにはチンはだめですよと、よく言ってました。電子レンジでチンはだめですよと。手づくりの物を食べさせなさい。でも、私はあのお母さんたちの動き方を見ていて、夕方に一瞬帰って、子どもと食べて、また出て行くわけですよ。チンはだめは、よう言わんな、しかし。チンでも、ポンでも、カンでも、何でもいいから、ともかく一緒に食ってることが大事なんじゃないかなと思うんです。

しかし、子どもが大きくなったら、こう言うでしょうか。うちの母ちゃん、ひどいやつで、いつ

もチンばっかりやと、レトルトばっかりやったと。何食わされたかわけわからない。ひどい物ばかり食わされたとは言わないんじゃないですかね。何食べたか覚えてないけれども、あんな忙しかった母ちゃんが、一瞬、一緒に食べてくれた。何を食ったか覚えてないけれど、誰と食べたかは覚えているとなるんじゃないですか。そこが物語化であって、私たちが一番、思いを込めてきたことなんですね。

そういう中で、実は私たちの伴走型支援には 1 つのモデルがありまして、家庭というモデルを想定しました。家庭には 4 つの機能があると最初に想定したんですね。家庭の第一の機能は、受け皿的機能で家庭内でのサービス提供です。ご飯を食べるとか、お風呂に入れるとか、病気になったら看護してもらえるとか。家庭内サービス提供機能です。

第二の家庭の機能は、私は家庭は記憶だと思うんです。家庭は記憶の装置だ。ずっと一緒にいるんで、明文化はされていないけれども、記憶としていろいろなことがたまっている。その記憶の装置があるがゆえに、今、起こっている事象に対しての対応が、選択肢が出てくるんですね。家庭は記憶だと。

3 番目の家庭の機能は家庭内でおさまらない事態が起こったときに、持続性のあるコーディネート、伴走的コーディネート機能。つまり、家の中で看護していたら治る病気だったらいいけれども、やっぱり入院させないかんわとなったら、いい病院を探す。つなぐ、もしくは行った病院がだめだったら戻す。つなぎもどしの連続的行使がここに出てくるんですが、家庭外のサービスへのコーディネート機能。

家庭の 4 番目の機能は何だったかというと、ここは一番大事で、今日の話の最後はここですが、役割の創出です。家庭というのは、上の 3 つは助けてもらうという立場なんだけれども、4 つ目の家庭の機能は、小さいころから何らかの役割を得ている。ここはものすごく大事で、お兄ちゃんは犬の世話とか、お姉ちゃんは金魚の世話ということが家庭の中で自然にあって、つまり、自分はそこで用いられている、その感覚がある。これを、どう我々はシステム化するかということが、北九州の NPO の仕組みづくりのベースになった考え方、伴走型支援のベースになった考え方なんです。

だから、先ほどのデータベースになるわけです。なぜ、データベースにこだわったかというと、家庭の第 2 の機能が記憶だったから。しかし、家庭モデルと幾ら言っても、今さらこの社会を家庭に戻そうなんて思っていませんから。自民党草案第 24 条を読んでください。家族は助け合わなければならないと書いてある。放っといてそんなこと、おまえに言われたくないよと言いたい。

家族が助け合わなければならない、家族がそれ言うんだったらいい。国が言うな。あのサッチャリズムですよ、完全に。社会はないのですと言い切ったサッチャーが再来して。国は面倒見ないと言っているわけでしょう。我が事で全部やってくれという話でしょう。危ない、危ない。だから、私たちは、別に家族家庭に戻そうと思っているわけではないです。家族家庭が持っていた機能をどう社会化するかというのが NPO だったんです、私たちは。だから、この機能をどう、我々は仕組みに変えるかということをやった。

しかし、実は 4 番目の機能がなかなかうまくいかなかったんです。自立支援センターに入る前と出た後の意識調査です。俺はひとりぼっちだと答えたホームレスの人は、まあそう思うまで含めて

8 割いたんです。それが、自立支援センター、我々が支援した後になると 4 割ちょっとにまで減る、半分以下になる。もっと言うと、全くそうだと言った人は 62% から 23%。つまり、孤独は解消されるんですね。

しかし、一方でこんな調査があったんです、同時期に。私はこれを見てひっくり返って、うちのシステム全部見直しやと言ったのは、これです。自分はこの世の中、社会にとって、なくてはならない存在だ。自己有用意識、誰かの役に立っているかという意識。北九州市民は約 6 割が誰かの役に立っている、必要とされている。ホームレスの人に聞くと、約 3 割が俺は必要とされている。これが自立支援センターを出た後でやったら、25% まで落ちたんです。助けられっ放というのは、いかにだめかということです。助ける側と助けられる側が固定化すると、助けている人がいいことやっているというのが、この社会的価値なんです。だから元気。助けられるというのは、この社会においては、人に迷惑をかけているというマイナス評価しかないです。そうすると、いつもすみませんと謝っているんです。

さっき、神学部の榎本てる子さんがカナダ行ったときに、英語もできないから、周りに、ソーリー、ソーリー、ソーリー、ソーリーとずっと言っていたと。そうしたら友達から、おまえのソーリーは何の意味もない、その言葉には。言うんだったら、サンキューと言えと指導されたんだとお話をしていたんだけれど、本当にそうなんです。日本人のメンタルは、誰かに何かしてもらうと、ソーリー、すみませんなんです。ご迷惑かけてすみませんと謝っているんです。ずっと謝らさせているわけですよ。そうすると、こうなっちゃったんです。これはだめだということで、自尊感情と自己有用意識、この 2 つをどう満たすかことになりました。

例えば東日本大震災において、私たちは石巻の先の牡鹿半島で、私たちの活動方針は、最も小さくされた人に偏った支援を行うのが活動方針だったんです。最も小さくされた人に、偏った支援を行う。ここの村は 9 軒しかなかったんだけれど、5 軒流された。壊滅状態でした。九州から物資を運んで、グリーンコープ生協と生活クラブ生協が一緒にやったんで、非常にきめ細かい支援をしました。

3 カ月たったときに、そこの村の長が本当に支援がありがたかった。けど、もういいと言い出したんです。何でと聞いたら、ありがたかったけれどな、重かった。ずっともらいっぱなしで、人からもらい物で 3 カ月も食べたのは生まれて初めてで、これ以上は気が重くてもらえないから、もういいですと言ってきたんです。

私たちはそれを聞いて、これはいかんということで、相互多重型支援という仕組みづくりに入ります。相互多重型というのは何か。相互性は、当然、助けられた者は同時に助ける者になれるという可能性。多重というのは、1 つの事柄に幾つもの意味を込めるということです。さらに東北一円は高齢化が進んでいて、後継者問題に悩んでいる。

結局、何をしたかと言ったら、我々は全国から資金を集めて、そこはカキの養殖の村だったので、カキ養殖を復活させたんです。カキ養殖を復活すると同時に、全国からホームレス支援全国ネットワークで出会った人々や石巻の地元の引きこもりの青年とか、就労困難な人たちにカキの就労事業をはじめたんです。今は普通の値段で買っているんですけれども、当初は震災復興ということで、浜の値段の倍で買いますということで、その事業自体が漁師さんたちの復興を支援するという

事業をしたんです。

漁師たちは全国から助けられながら、路上の青年を助ける。路上の青年たちは漁師から助けられながらカキを販売することで、漁師を助ける。これが相互性です。多重型というのは、食べた人は 1 粒で 2 度おいしいカキ、震災復興と困窮者支援ができるということで、1 粒で 2 度、3 度おいしい。100 人に 1 人でも漁師をやりたいという人が出てきたら後継者として認めてくれるかと聞くと、それはオーケーだという話になっていまして。実は大阪の団体からも 1 人、ここに来られて、何カ月か就労訓練を受けて、今は大阪に戻られて、困窮者支援の施設の責任者になられているという方が、ここから出ているんですね。

困窮者支援とソーシャルビジネス。相互多重的であること。仕事づくりと人のマッチングでやっていくこと。あとは、消費における富の再分配です。税金で再分配するのもいいんだけれども、物を売ることにおいて仕事をつくって、そこで再分配構造をつくっていく。参加型の社会創造をしていくということでやりました。これが、このカキの訓練、笑えるカキというのをやったんですね。今まで 24 人。今年もやっているんですが、残念ながら、おとといノロが出まして。カキが出荷停止になりました。

最後に、先ほどの生笑一座ですが、元ホームレスの人たちに出番ができて、子どもたちに、何とホームレス体験をネタにしてやるのを始めたんです。非常におもしろかったです。関西の読売テレビさんが、ニュース映像をつくられているんで、短いニュース映像なんで。

（ニュース映像）

これが、日本の「働く」を考えるという特集だったからおもしろい。働くって何なんですか。

この西原さんは、11 年間アルミ缶で生きてきたんで、子どもたちにアルミ缶の仕事のワークショップをやっているんですね。アルミ缶とスチール缶があって、これの仕分け競争。西原師匠に挑戦コーナーをやっている。この日は西原師匠が負けた。

こういう活動をやっていて、なぜこれを紹介したかというと、長年やってきて、1 つのディスアドバンテージなのかどうかわかりませんが、大きな失敗は助ける側と助けられる側の固定化だったんです。それが十数年前に明らかになって、次々にその一方通行をどうするか、その中での取り組みで一番新しいのがこの生笑一座です。この人がよく言うことは、野宿に戻りたいとは思わない。しかしそれは、今では無駄だとも思わない。価値の転換が今から大事だと思うんです。マイナスを埋めることから始まったんだけれど、実はマイナスはプラスだったんじゃないか。野宿経験は二度としたくないと彼は言うんだけれど、その意味はマイナスだけれど、しかしそれがなかったら、この人は今、これでやっていないです。これ 1 回やると、この人のギャラは 1 万円もらえるわけで、稼ぎにもなっているんです。

という中で、価値の転換ということが、NPO という活動においては、問題を解決するということをよく言うんだけれども、問題を解決しているだけではだめなんじゃないか。それを全く価値転換することによって、新しい風景を見られるかどうかが勝負なんじゃないかとこのごろ思っていて、相互多重型支援とか、こういうこととかになっているんですね。

すみません。私の話は以上です。

○司会　お二人の報告を通じて、皆さんにとって、なじみのないソーシャル・ディスアドバンテー

ジが、おぼろげながらかもしれませんが、わかってきたのではないかなと思います。

これから少し休憩をとりまして、その後、皆さんと、ソーシャル・ディスアドバンテージを含め、いろいろ相互にディスカッションをしていきたいなと思います。10 分弱休憩をとろうと思います。4 時 50 分ちょっと前ぐらいに再開しますが、その際、皆さんからの積極的なご発言を求めますので、ご質問内容、コメント内容、いろいろ考えていただければなというふうに思います。

どうぞ、よろしくお願いします。

（休憩）

○司会　本日はお二人の実践家の話から、かなり濃密なホームレス支援の実態、あるいは支援の中から見出されるディスアドバンテージ、SD、ソーシャル・ディスアドバンテージが浮かび上がってきたのかなと思います。

それでも、皆さんの中で、まだまだわからなかったこと、わかりにくかったこと、あるいはさらに突っ込んで聞いてみたいよということがあるのではないかなと思いますので、まず、フロアに開いていきたいと思います。ご自由にご発言いただければと思います。

いかがでしょうか。

○質問者 A　奥田さんに質問したいんですけれども、そちらの団体名、NPO 法人の大変漢字が難しいんですけれども、私の体験からいったら識字学級とか障害がある人たちに平仮名を長らく教えてましたもので、難しい漢字を書くと団体名が読めなかったりするんです。何であんな難しい漢字の団体名にしたのかなと思って。

○奥田　まさに難しくていいかなと思ったんです。単純に、いろいろ名前は、名前を決めるだけで、うちの職員、ボランティア含めて、1 年ぐらい議論をして、最後は投票で決めるみたいなのをやったんです。NPO 法人テントとか、ひまわりとか、いろいろわかりやすいのもあったんですけれども、わかりにくくやろうということになったんですね。

ひまわりというイメージはわかりやすいんだけれども、我々の活動との結びつきでいうと、あえてわかりにくいけれど、ちゃんと 1 回説明すれば、抱樸って、そういうことかと理解してもらえるだろうと。

今日は時間がなかったので抱樸の説明しませんでしたけれども、私は牧師ですが、実は老子の言葉で、中国の。抱は抱くですね。樸は、木へんの樸で、原木という意味なんです。だから、山から切り出された原木を、あれこれ条件つけないで、そのままお互い抱き合おうという発想です。

日本の福祉もそうですけど、制度は、例えば申請主義で、何か条件が整わないと受けないのが前提です。木材でいうと製材所に運ばれて、きれいに整ったら引き受けるけれども、そこまでやらない限りはだめよと言ってしまう。でも困窮状態にある人は、ほとんど自ら声を上げられない状態におられるので、そうなると条件を課して待っていてもだめだということで、それで原木をそのまま抱くということで、抱樸にしたんです。

さらに原木ですから、荒木ですから、抱き合うと多少傷つく、けがする。でも、傷つかないような関係は何も生まないんじゃないかという発想もありまして。木へんですから。この間、私、大きな会場に呼ばれて行ったら、大きな字で手へんになっていました。手へんの撲は、どつくという意味なので。覚えたでしょう、抱樸。

テレビに出ると、この間、朝日放送さんがつくったドキュメントでは、ホウボクという発音していました。何でなんですかと聞いたら、ホウボクと言うと、牛とか馬、放すというイメージでとる人が多いので、ホウボクというイントネーションにしましたと。

覚えたでしょう。終わり。

○司会　続けてどうぞ、いかがでしょうか。

○質問者 B　お二人にお伺いしたいんですが、貧困ビジネスをやっておられる方とトラブルとか、そういうことはありませんでしょうか。あった場合、どういう形で解決を図られているか。おっしゃりにくい点もあろうかと思いますので、差しさわりない範囲で教えてください。

○川口　貧困ビジネスをやっておられるところとのトラブルだったら、どう対処したかということですが、うちでは、今のところ何もできておりませんで、何区にある、どこどこは、これは絶対、貧困ビジネスやんみたいな、わかっているのあるんですが、どう対応、対処したらいいのか私たちも悩んでいるところです。そこの区役所の方にもお話を聞いたりするんですけれど、スレスレのところやから、区役所としても彼らが貧困ビジネスとわかっているけれども、渡すしかないんですよねみたいなところで、おっちゃんたちに注意喚起をするところしか私たちはできていないですね。

○奥田　今、実は、国のほうで貧困ビジネスの規制、いわゆる貧困ビジネス系の施設の規制をどうするか非公開の会議がなされていて、私もそれに出ているんです。社会福祉法の第 2 種施設で、無料低額宿泊所が届出施設になっているんです。もともとは、社会福祉法上の 70 条、72 条で監査ができて、なおかつ事業停止までいけるんです。けど、これがなかなか使われない。社会福祉法はなかなか実行されないので、もうひとつ別の法的枠組みを、今つくろうかどうしようかという話は、一方ではしています。

ただ一方で、実は貧困ビジネスの話、今、川口さんがおっしゃったところが一番の問題で、使っているのは役所です。その系統の施設に紹介しているのは、ほとんどが役所で、だから必要悪みたいになっているんです。この構造を断ち切らない限りは、なかなか現場で業者同士というか、事業者同士が言い合うところでは防げないところまできていることも事実です。

うちの場合は、北九州市は生活保護の家賃が 2 万 9,000 円です、月。大阪、幾らですか。

○司会　大阪は 4 万円。

○奥田　4 万円でしょう。北九州市は政令市ですよ、100 万都市で。これで 2 万 9,000 円。福岡市は 150 万都市だけれど、3 万 6,000 円。

正直、家賃が低過ぎて、貧困ビジネスが入ってくる余地がないんです。うちに来てもおいしくない。それと、やっぱりうちに何か仕掛けてくる人って、余りいないですね。貧困ビジネスだと思われているんですかね。

○司会　続けて、自由にご発言ください。いかがでしょう。

○質問者 C　お話、ありがとうございました。出身が北九州市で、奥田さんとお会いできてうれしいです。

○奥田　ありがとうございます。

○質問者 C　奥田さんに質問ですけれども、先ほど相互多重型支援の話で、助ける側と助けられる側に固定化してしまったことが大きな失敗だというお話をされていたのを聞いて、確かにすごく

共感するところもありつつも、それが子供への支援の場合、どのように考えればいいのかなと疑問に思いまして。

自分は将来的に、不登校の子供のニーズを吸い上げて権利擁護をするような支援を、システムづくりをするような支援をしたいと考えているんですけれども、そのときに、助ける側、助けられる側、固定化されないためには、どのようにすればいいのかということについて、ぜひ、ご意見をお伺いしたいです。

○奥田　うちも、今、子ども支援やっているので、その辺は課題なんです。1つは、子どもは時間軸が大人と違うんで、どんどん成長して、次のステージ、次のステージへ行くんで、その時点、事態で完結、助ける、助けられるか、完結するかどうかは余り大きな課題ではない。特に子供の場合は、自分が大事にされていない、されてこなかったところの感情が非常に強いんで、まずはどう受用するか。

つい最近も少女苑から出てきた、その子は二十で出てきたんですが、引き受けたんですが、最初の半年ぐらいは試し行動で、すごかったんです。ありとあらゆることしてくれまして、すごかった。半年たったぐらいで、やっと落ち着く。多分、本能的にやっているんです、試し行動。本当にこの大人を信用して大丈夫か。今までみたいに、どこかで出ていけと言うんじゃないかとやられちゃうんです。子供の場合、大人もそうなんですけれども、特に相互性がいく手前のマイナス分が大き過ぎるのがある。

もうひとつは、助ける助けられるのを、能動的な事柄だけで考える必要はないと思うんです。もっと存在的なもので、例えばうちが来年度にかけて、新しい施設、さらにもう1個、今、構想しているんです。そこは完全に共生型施設で、中にホームレスもお年寄りも障害者も子供も全部一緒にやろう。そうすると、存在としての、お互いのニーズが満たされていく。お年寄りにとって、子どもと接することはすごくエネルギーがもらえるみたいな場面でもあるんです。うちのレストランで、毎週水曜日が「なごみカフェ」というカフェをするんですが、地域の子どもたちが来た瞬間にステージが変わるというか、カフェがわっと。また、めちゃくちゃ小学生が将棋が強いやつがいて、これが次々におじさんを負かしていくんです。そこで盛り上がっていく姿を見ていると、別に子どもに社会奉仕しろというイメージじゃなくて、その子の存在が何かほかの人に影響を与えていくみたいなステージのつくり方はすごく。

ただ、もうひとつの問題は物語なんです。そこを釈義してやることってすごく大事で、実はこういう支援は、事実は余り変わらないんだけれども釈義の勝負なんです。釈義という言い方がキリスト教的かもしれない。

私は牧師なんで、聖書で決まっているわけですよ、言葉は。それを毎週、どう釈義するか。解釈です。私の仕事は解釈の仕事なんですね。物事を、いい支援員は物語れる人たちで、余り思い入れ込めて物語ったらだめです、その人のストーリーに合わせてしまうから。でも、その釈義の話が大事で、だから子どもたちにとっても、何か折に触れて、あのおじさん、こうこうで、おまえさんが来て、物すごく変わったんだよみたいな話をしていくのはすごく大事。能動的な場面だけじゃなくて、存在として役立つ、そういうステージもあると考えていますね。

○司会　ほかに、何か質問ございますか。

○質問者 D　先ほどのお話で、川口さんからは生活保護制度の枠もある、奥田さんからは、生活保護とか年金受給をされている方の一部がホームレスに移り変わっているという話があったんです。制度自体ではなくて、例えば生活保護の窓口におられる方、相談に来られる。でも、対応がどうかあったのか行政不信に陥っている方がおられるとか、あるいは労働局、ハローワーク。今、多分、生活保護を受けられている方とか児童手当を受けられている方向けに、就労支援をかなり力を入れていっているようですけれども、そういった支援に入っておられる方々、ごらんになっていて、こういうところに気をつけてほしいなとか、こういったことを今後やってもらえたらなということがあれば、ちょっと行政の方がおられるので、言いにくいこともあるかもしれませんけれど、教えていただければと思うんです。

○司会　これについては、お二人からリプライしていただければなと思いますけれども、いかがでしょうか。

僕のほうでも重ねてお聞きしたいのは、お二人の活動って、民間の NPO の活動だけれども、やっている事業内容は、相当、公益性が高いというか、公共的な課題に向き合ってやってらっしゃいますし、行政が本来担わないといけないようなお仕事を、かなりやっている部分があるのかと。

一方で行政は行政で、例えば社会的孤立の問題に対応する事業をやっていたり、例えば社会福祉協議会という、行政組織ではないですけれども、公的機関、公的な性格がかなり強い機関があります。こうした公的な組織と民間の NPO みたいな、非常にボーダーレスな状況があるのかなと思って聞いていたんです。こうしたときに、NPO の強みみたいものもあると同時に、行政の責任みたいなものもあるかなと思います。

今の質問と重ねて、このあたり行政に何を期待しているのかとか、あるいは行政とこういうふうにすみ分けをしているんだとか、こんな点も含めてご回答いただければ、より意味のある学びになるかなと思いますけれども、いかがでしょうか。

○川口　私は先ほど奥田さんのお話を聞いていたときに、一番すごいなと思ったのは、自立支援センターを運営されている中で、強制退所だったりとか、お断りすることがないという姿勢がすごいなと一番あったんです。

というのも最近ホームドアに、とある自立支援センターから、ちょっと、うちでは面倒見切れないから、ホームドアさん見てよという形で、ホームドアの前で、おっちゃんが、姥捨て山のように置いていかれるみたいなことがございまして。そういうところに見られる、行政の窓口的なかかわり方、うちではちょっと対応できないという姿勢が、一番、私は変わってほしいなと思っています。

そこで対応できなかったら、どうしたらいいんだろうというのは、当事者がもっとわからない。もっと行政の制度に詳しくないわけなので、ちょっと、うちで対応できない、でも、こうこうこうするんだったらできるんじゃないかなとか、そういう行政職員の歩み寄りというか、自分たちが最後の砦なんだという意識があったら、もうちょっと変わってくるのかなと思いました。

○奥田　この間の小田原の事件もそうですが、生活保護行政自体が、庁舎内での意味づけとか位置づけがうまくいっていないんだと思うんです。どうも、いろいろな情報を見ていると、「保護なめんなよ」のあの言葉は、被保護者に対しての言葉のみならず、役所内に対するアピールだった。要

するに、生活保護担当者は、それこそ姥捨て山状態になっていて、一番人気のない部署に回されている。逆に言うと、そういうところに回されないで、ずっと上へ上がっていく職員がいれば、そっちに回されている職員がいるみたいな構図が、多分あったんですね。

一番苦労している俺たちが、何で後ろめたい思いをせないかんのか、保護なめんなよというのは保護行政なめるなよ。被保護者に言っただけではなくて、庁舎内の侮蔑というか下に見られていることに対して、彼らが言ったという説もある。

だけど、私は長いこと生活保護行政を見ていて、やっぱり可愛そうなぐらい誇りを持っていないです、自分の仕事に。そして、早く3年過ぎないかなとみんな思っている。それは、やっぱり事実なんです。そのあたりは、今、川口さんがおっしゃったとおり、職員さんが、自分が何をしているのか、まさに釈義の問題なんだけれども、意味づけの問題が足りていないから早く3年過ぎてほしい、これでキャリアアップなんか絶対はからないみたいな。それをやめようといって横浜市さんとか、幾つか専門職を配置し始めたわけですね。

ただ、それでも、私は制度の問題として、給付とケアのバランスをどうするのか。第1条に自立の助長だと書いています。最後のセーフティネットだというけれども、法律概念上で言うと、もっと手前でもいいわけです。自立の助長だから。全部なくしたら来いじゃなくて、もうちょっと手前でおいででも行けるはずなのに、それを最後まで放ったらかして、一番最後に命だけ助ける。しかも現金給付が中心になって、給付管理になっている。これを、幾ら今のケースワーカーさんに、ケアもやりなさいと言っても、やっぱり無理だと思います、その点では。そうなると、民間をどう活用するかで。

北九州市は奇跡的だと思うんですよ。私たちも長年やって、最初はけんかしていたというのも功を奏して、今は特に若者の就労支援と子どもの支援に関しては、ケースワーカーとの合同ケースカンファレンスが開かれるようになったんです。そこには、例えば子どもの場合だったら学校の担任も来るし、スクールソーシャルワーカーも来るし、生活保護担当者も来るし、うちの支援員も来るし。例えば親が刑務所云々という話になったら、うちの更生保護部門も来る。そこで、ケースワーカーが保護記録を全部一緒に共有するんです。保護の記録の内容を。ちゃんと仕組みをつくって、個人情報を漏えいできないように、ちゃんとやった上でやったんです。その上で、やはり我々が民間としてのケアの部分をどうするかを考える。

例えば生活保護の改悪の中で、親とか身内に保護の責任を回そうとしたでしょう。請求書を身内に回して済むんだったら、こうなっていない。無理なんです。でも身内はある意味、全然違う場面で使えるんじゃないですか。つまり、お金の問題で身内に手紙を出しちゃうから、もう私は関係ありませんと言うしかない。でも月に1回、まずは電話してもらえないかと。そして、その様子を教えてくれないかと、例えば親とか息子に頼むということはできるんじゃないか。

だから、ケアと給付の組み合わせを、もう少し社会的な範疇でチームを組めないかというのが、私は本来行政がと言いたいんですけれど、30年近く言ってきて、なりませんから。そうじゃなくなっている、もう。逆に言ったらすべて行政のお世話になるのも嫌なんで、私は。いろいろな人がかかわったほうが絶対いいという確信があるんで、そういう意味では、行政は使いようだと思います。

○司会　もうお一人、質問の方がいらっしゃいます。お願いします。

○質問者 E　奥田さんのところは行政とけんかしていたけど、今は 100 人の規模だと。川口さんのところでも行政との関係が大変難しいということ。NPO では、しんどい仕事をすればするほど、役所とけんかしたくないというか、一緒に事業をやって協力してほしいという、協力しないと大きくなれないとか、費用を捻出できないとかがあるかと思うんです。

奥田さんのところって、どういう形で行政との関係をマネージしながら、闘いながら大きくなったかということについて、ヒントになるようなことを教えていただけたらなと思います。

○奥田　これは、なかなか舵取りが難しくて。ついに、北九州市が炊き出しを排除するという場面にまで行ったんです。そのときはものすごい大げんかになって。世界へ、人道支援活動を追い出す行政があるんだと発信したんです、2000 年 8 月。世界中から北九州市に抗議が来たんです。でもそのときに、僕と行政の間に、その春に自立したおじさんが立ちはだかって、行政を指さしながら、あんたたち何をしてくれた。俺の荷物を捨てただけじゃないか。やったのは全部この人たちだ。この人たちが全部やったんだと言ったんです。だけど、私はその言葉を聞いて、全部やってないなと思ったんですね。

いつも運動家のねじれた心が、行政が悪いからホームレスのおじさん死ぬんだという論理構造になるわけです。野宿のおじさんからしたら、川口さんから助けられようが、大阪市から助けられようが、通りがかりのサラリーマンから助けられようが、そんなことどうでもいいんじゃないですか。目的は、この人が幸せになるということなんで。そこにおいては、活動を長いことやっていると、行政のせいにして、NPO がやらないという自己規制の理由にする。つまり、行政が施設をつくらないからホームレスが死ぬんだという論理展開するわけです。それで行政交渉を一切止めた。翌年の 5 月に初めて施設をオープンさせたんです。それが 2001 年 5 月。その上で、NPO ベースで、北九州のホームレス問題を解決するためのグランドプランという綿密なプランを出して、それを行政に出しに行ったんです。そこからが始まりで。

こっちが何を考えているのかも多分わかっていなくて、単に騒いでいる人たちだみたいぐらいに思っていたかもしれません。こっちはえらく真面目に事業計画を全部立てて、やって、そして行政との協働が始まって、最初に私たちがグランドプランに則して市民協議会から提言書を出した提言は、最初の 3 年間で 95% を達成したんですね。

そういうことでやってきたのと、もうひとつは行政委託事業、今もやっているんです。NPO の事業全体の 50% は行政委託事業です。行政委託事業をやるときに、プランニングをいかに一緒にできるかが勝負です。行政が全部つくった設計図で、はい、誰かやりなさいといって、下請けやっていると、これはけんかできないです。プランをつくる段階で、例えば自立支援センターの、もともと自立支援センターは北九州市の保健所だったんです。そこを 1 億円かけて改修する。そのときの、改修の設計図は、実は北九州市と NPO と、業者と 3 者で、3 カ月ぐらいかけて、ここに風呂つくろうとか、ここに食堂つくろうとかやったんです。最初に行政が持って来た図面は、180 度変わったんです。行政は入口に食堂をつくろうとしてたんだけれど、それは落ち着かんやろうということで、一番奥につくろうとか、そういうプランニングに NPO がタッチできるかが勝負だと思うんです。

結局は人間ですから、共同作業をする中で信頼が生まれる。NPO もリスクを負っていることを、行政はそこで。行政に全部やらせているんじゃなくて、つまり、私たちが、行政に出した提言書、グランドプランに則する提言書は、例えば 20 の事業を提言します。このうちの 12 は行政がやってください。8 は民間がやりますという提言書をつくったんです。これは効果抜群だったです。

つまり、20 個、行政に物申すで、全部おまえらやれとやったら、多分、行政は帰ってと言う。そうじゃなくて、これだけホームレスの人を支援するには、これだけの枠組みと事業が必要だ。けど、このうちの 8 つは民間で何とかするから。例えば、さっきの法律家の会とか、居宅支援の会。こういうのは民間で全部やるから、ここはどうしてもできないから、ここは行政やってよと、半々とまではいかないけれど、6 : 4 ぐらいの割合で行政に提言した。そうすると 9 割以上達成できた。そういういろいろな工夫をしました。

○司会　まだまだ議論ができればなと思っているんですけれど、ありますか。先にそれを聞いて、できれば、これ、おもしろい試みかなと思うんですけれど、お二人で相互にいろいろ質問してもらってもいいんじゃないかなと。

なかなか一緒に登壇する機会もないと思いますので、それぞれの立場から、今回の報告を聞いて、どういう疑問が出たとか、さらに聞いてみたいということがあれば、お二人の討議みたいなものもできればなと思っています。

そうしたら、今あげていただいたお二人から質問を受け付けたいと思います。

○質問者 F　私の質問は、日本の中で自立支援だったり、野宿者の支援だったりの活動が幾つもある。私がいろいろなところで、そういう活動を見せていただくたびに、ひとつひとつがほかの活動と必ずしも有機的に結びついてないと、ときどき強く思うことがあって。尼崎でも大きな活動があって、神戸でもやっておられる。大阪にもある。あるいは尼崎の中には、幾つもの団体がある。

私はドイツのことをやっているんですが、ドイツに行きますと、全国をつなぐ組織もありますけれども、行政は必ずしもぽんと出てこないで、NPO なり NGO なり、地域と結びついた活動をする団体がある。しかし、地域にも根差しながら、全国の組織ともつながって、いい形で、どのぐらいいいかは何とも言えません。ただ、行政とのかかわりでは、比較的好ましい形で運営が進んでいるように見えたんです。

今、たまたま行政の話が出ていましたので、行政とひとつひとつの事業所なり団体。それと例えば、それがどこでどんなふうにつながると、今の活動がより本当に有用な、有益な知識がたくさん詰まっている。そういう活動をしておられて、今日のお話にもたくさん学びがあったんですが、そういうことがひとつの団体の中でだけ生かされるよりは、もう少し広がりを持った形で、いろいろな形で。

ただ、地域の特性が生かされたほうがいいんだということは、今日のお話でも非常によくわかったんです。そのいい関係は、組織のような部分の話になるかと思うのですが、地域とのかかわり、あるいは行政とのかかわり、あるいは活動している団体が横でどうつながっていくか、それはどんな形だったら、今、持っておられるような知識なりがもっと生かされるようになるんだろうかというのが私の質問です。

○司会　続けていきましょう。まとめて答えてもらえたらいいなと思います。

○質問者 G　講演、ありがとうございます。

私は京都府の学校でスクールソーシャルワーカーをやっています。

今年、大きないじめがありました。先生方がいじめということで、生活指導を厳しく入れたところ、不登校の子供がたくさん出てしまいました。ひとりひとりを見ていくと、余り人とかかわれないというのは、私はという話しはできるのだけど、人の気持ちを思いやって会話を交わすことができない。奥田先生とかのお話を聞く限り、かかわりってすごく大事であるというのがわかりますが、その辺をどういうふうに支援していけばいいか悩んでいます。

○司会　答えられる範囲で、答えやすいところから。

○川口　まず、ほかの支援団体とか行政とのつながり、どうつくるかというところなんですけれども。うちとしては、現在は、使えるものは使おうみたいな感じで、使える限り、いろいろな団体さんに、その団体さんに合う方がいらっしゃったら、そちらのほうが絶対いいと思うでとご紹介させていただいたり。

あと、最近すごいいいなと思ったのが、うちの相談ボランティアさんの中に、某、大きな NPO の釜ヶ崎の団体の方が入ってくれたりしたものですから、ほかの団体さんとのつながりって、そういうところでも生まれてくるんだなと感じていて。ただ、まだ、どうつながれるのがいいのかも模索段階ですし、むしろほかの支援団体さんから、私たち、そんなよく思われていないんじゃないかなと、びくつく心もあったりとかしているので、どうするのがいいんだろうと悩んでいるところでもあります。

行政が、そういうのはやったらいいんじゃないかみたいなこともよく言われるんですけれども、行政が本当にニーズに沿った支援をするのは、とても大きな組織なので、細やかなニーズを拾い上げるとか、それをどう反映する、システムをつくるって、なかなか難しいと思いますし、やっぱり失敗ができないみたいなところもあるんです。

だったら、ホームドアのような小さな団体でも、どういう支援のあり方が本当にいいんだろうかというのを、日々、模索しながら、おっちゃんたちとつくり上げたものが、いつの日か行政さんにとっても、それいいねと思ってもらったら、何かしら行政の支援制度の中に反映してもらえたらいいんじゃないだろうかと、目標としながら活動しているという状態です。

いじめ問題について、関係性のつくり方。

○司会　関係性をつくることが、非常に難しい子供たちがいるのが現実であると。そうした子供たちと、どういうふうにかかわりを持っていったらいいのかということですかね。違いました？すみません。

○質問者 G　いじめ問題にしても、不登校問題にしても、人とかかわれないから、かかわりたいんだけれど、かかわれないから、ちょっと出し方を間違えちゃって、いじめに遭っちゃう。そういう気持ちでいくことになっちゃう、そういうことかなと私は理解しています。

やっぱり、今の子供たちって、すごく空気を読むことはうまいんだけれども、本当の意味で人とのかかわり方が見えてないだろうし、そういう子供たちに、どういうふうにホームレスの方とかを通して、寂しいんだけれど、かかわりたくない人もいらっしゃると思うんです。そういう人たちにどうやって、人とのかかわりを用意しているのかなと思って聞かせてもらいました。

○川口　支援でかかわる中で、私たちも夜回り活動、お弁当をおっちゃんたちに持っていくんですけれども、「おっちゃん、お弁当持って来たよ」と言いはするものの、そんなん要らんみたいに言う人もいらっしゃれば、幾ら声をかけても、なかなか反応が返ってこない方もいらっしゃるというのが、ちょっと近いところかなと勝手に感じたんです。

やっぱりそういう方々に対して、私たちは声をかけかけ続けることが一番かなと思っていて、やっぱりその人が何か一歩を踏み出そうというきっかけって、どこにどう落ちているかわからないのかなと思っているので、声をかけ続け、かけ続けたら、いつの日か、「ん？」とか何とかでも言ってくれるのではないだろうかと、その根気しか私のところでは回答が出ないですけれども、名案を奥田さんに求めたいと思います。

○奥田　まずは、支援団体同士のネットワークと行政の関係ですが、私はこんなこと長いことやっているので、実はホームレス支援全国ネットワークという組織をつくっていて、90団体ぐらい入っていまして。あと最近では、3年前にこの関学借りてやったんですが、生活困窮者支援全国ネットワークも代表をやっていまして、私と宮本太郎さんと高知市長が代表です。そこは、大体1回やると、全国大会で1,000人とか1,500人集まってくるんです。

しかし、地域においてもそうですが、私はネットワーク組織をつくる原則は、できれば、まずはネットワークつくっておこうという発想が結構あるんですが、ほぼ機能していない、そういうネットワークは。どちらかというと必要が全てで、やっぱりケースなんだと思います。ケースから入らないとだめだと思います。この人とか、この家族とか、この課題からネットワークの核をつくらないと、特に行政がやると充て職になる、必ず。何とか居住関係者会議とかいったら、ハトのマーク代表とか、ウサギのマーク代表とか、ずらっと出てくる。そんな偉い人出てきても、ほとんど、先生がおっしゃったような、有機的なものはできないです。

まず、ネットワークが必要だではなくて、まずこのケースというところから地域資源をつないでいくというのが、今まで、うちはそっちだったですね。ただ、さっき出てきた市民協議会は行政が本部をつくったので、あのままいったら行政に飲み込まれるという非常に大きな圧力だったので、これは負けられないということで、商工会議所から何から全部入れて、市民協議会という組織を対抗でつくったんです。あれは、1、2の3でつくったんで、その後、部会をつくって、ケースができるようにはしたんです。いずれにしても行政が先か、NPOが先かではなくて、ケースが先だと。行政がやるのでも構わないけれども、ケースができないネットワーク配備は意味がないと思いました。

あと、もうひとつのかかわりの問題です。川口さんがおっしゃったとおりで、待つしかないです。風が吹くときがありますから。問題は、風が吹いたときを気づけるかどうかだけです。その子を変えようというのはほぼ無理で、「あ、今日」みたいな日が、長いことやっていると、何となく、「ああ、今日」みたいなタイミングがあって、そのとき誰が横にいるか勝負みたいな話ではあります。だから、待つしかないということですね。

それこそギリシャ語の概念で、時というのをカイロスという言葉と、クロノスという言葉を使い分けています。クロノスというのはクロノジカルという、要するに時計の時間のことをクロノスですよね。クロックのもとになった。一方でカイロスは神の時みたいに訳していて、花が咲くときが

あるじゃないかという、それは何時何分に咲くんじゃなくて、花が咲くとき、生まれるにとき、死ぬるにとき、これ全部カイロスという概念なんです、ギリシャ語では。

事業になると、必ず、学校も卒業という時間が迫っていたり、1 学期の終わりが迫っていたり、事業はクロノスの世界です。けど人の支援は、実はカイロスの世界なんです。クロノスの世界とカイロスの世界をどこでぶつけるかは、実は事業をやりながら支援することの一番しんどいところです。国が事業をすると、支援開始から始まって、支援終了宣言で終わるんですよ。生活困窮者自立支援法は。ばかだなと言っているんですよ、そんなこと言ったら怒られる。けれど言っているんですよ会議で。そんなことあり得るかと。支援開始から始めて、支援終了。終了言われた瞬間に、俺、明日どうなるのと言われたらどうするの。

事業と支援は一体的なものではなくて、位相がちょっと違うんです。その異質なものを、どうコミットさせるかというのが勝負。そこに一番大事なのは時の概念のずれです。事業で言うところの、クロノスの時の概念と、カイロスという神様しか決められない。うちの長男も、どんな頑張っても学校行きませんでしたから、2 年間以上。どれだけしてもですよ。私、毎晩、彼とマラソンもしました。夜中、ゲームセンターも通いましたけれど、いろんなことやったけれどだめですね。

もうひとつは、先生ぜひ、関係というんだけれども、関係を不特定、私の伴走支援論は、正直言うと、非常に語弊のある言い方しますけれど、質より量なんです。物すごいスーパーマンみたいな人が、世の中にはいるわけですよ。例えば、スーパーマンみたいな人が確実な 5 本線で結ぶよりか、ちょっと頼りないけれど、100 本ぐらいの細い糸でつないでおくほうがいい。100 本つながると、10 本切れても何とかなるんです。けど、強烈な糸で 5 本だけで結んでおくと、3 本切れたらもう不安。どうしようもなくなる。

世に先生と呼ばれる職業の方々は、私は牧師先生ですが、5 本をやりたい人ばっかりなんです。俺が何とかする。大体、大変なことになるんです。そうじゃなくて、私なんか最初から降参していて、100 本の糸でやっておく。

だから支援も、ぜひ私は、使命感の高い先生が何人もいてくださることがすごく大事だし、教育に本当に命かけている、私なんか伝わってきて痛々しいなと思って。1 回九州に遊びに来たほうがいいですよ。私が温泉に連れて行きますから。余り、俺、俺、とやらないで。

1 回、ちょっと手放したほうがいいと思うし、イメージとしては細い糸でいいから 100 本ぐらい、いろいろな。しかも、それは切れていくんです。次々。でも、100 本結んでいると、たいがいごまかせる。どうしても使命感に燃えている職業の人たちは、確実な 5 本の糸で結ぼうとするから、本人からしてみたら重いんです。ありがたいけれど、重い。これが、さっきのハマグリ浜だったんですよ。僕は強烈な糸を持っていったわけですよ。物すごくでかいのを九州から。これさえつながっていたら、おたくは絶対大丈夫みたいな。でも、3 カ月後に言われたのは、ありがたかったけれど重かったと言われたんです。

それでも、あの手この手で、いろいろな人をあの浜に連れて行くようになって、今は、彼らいろいろな人と関係をつくってやっていますから、うちがいなくなっても大丈夫なんです。

それぐらい、ちょっとごまかしてやられたらいかがですか。カイロスですから、しょせん。悪いのはこっちで、神様が悪いんですから。

○三浦　それでは時間をちょっと過ぎてしまいましたけれども、今日は 3 時間を超える長い時間、お二人とも、どうもありがとうございました。

ソーシャル・ディスアドバンテージ、なかなか言えない言葉ですが、今日、一番勉強になったのは、我々はネガティブなものとしてこの言葉をとらえていたけれども、もしかすると価値観の転換みたいなところをはらんでいる、その見方は、今日はっきり言って、新しくいただきました。これは今後、この研究会で深めて行けるかと思います。

本当は、さっき、白波瀬さん言われていたように、お二人の会話というかトークをぜひ聞きたかったんですけれど、それについては、またもしも機会があればということですし、できれば、きょうのこの場でお話いただいたことを、何らかの形で、みんなで共有できたらいいなとも考えておりますので、またその節は、よろしくお願いしたいと思います。

○奥田　先生、最後にいいですか。

○三浦　どうぞ。

○奥田　さっきお配りした署名ですが、期限が迫っていまして、今年の 8 月 7 日までに、この法案を再延長させないと、日本の法体系からホームレスという言葉が消えます。生活困窮者自立支援法で具体的な事業は引き継がれているんですが、理念法なんだけれど、この理念がないとだめだというのと、もうひとつは、地方の行政は、この法律にのみ基づいてホームレス支援実施計画をやって、立てるんですね。これがなくなったら実施計画自体がなくなるので、生活困窮者自立支援法では、それは定めていませんので。今日、来られた方々、もし、よろしければ、書ける人は肩書も書いていただくと、より、うれしいということですので、すみません、お願いします。

○三浦　書いて、提出して。

○奥田　私にいただくか、もしくはメールアドレス書いていますので、メールでも結構ですので、うちの全国ネットに直接メールで、賛同しますと送ってくださったら、それで結構です。

○三浦　皆さん、長時間ありがとうございました。

拍手でお二人をお送りしたいと思います。

しばらく、奥田先生、残っていらっしゃると思いますので、この要望書、御賛同いただける方、ご本人に直接渡していただければいいかなと思います。

ありがとうございました。